谷口研究室

63年度年間活動報告書

Vol. 6

甲南大学文学部

谷口研究室

63年度年間活動報告書

Vol. 6

甲南大学文学部

目次

巻頭言　谷口　文章　1

Ⅰ．第十六回ゼミナール合宿（春季）
1．日程　4
2．解説：“脳死”についての討論会と箱庭実習　谷口　文章　5
3．討論会
“脳死”について—討論会報告—　北村　真　6
脳死とそれをめぐる生と死—臓器移植を背景として—　小谷　英子　12
脳死についてのグループ討論会でかわされた議論について　植木　通博　16
4．研究発表
一瞬と永遠—その間に浮かぶ自己存在をめぐって—　西村　由美　18
脳の働きと「こと・もの」的見方　辰巳　法光　20
春合宿における“哲学体験”　岡田ひでよ　22

Ⅱ．第十七回ゼミナール合宿（夏季）
1．日程　26
2．研修レポート
苦悩と救い　小谷　英子　28
いのちのつらなり　阪田　和子　29
希望—生きるということを考えて—　辻　啓之　31
夏、水俣での日々　榎本　修一　34
自然と人間—ゼミ合宿に参加して—　山本たまみ　37
魅せられた水俣—内なる自然を取り戻すために—　坂田　佳子　40
文明への基礎的一考察　深谷　昌生　42
公害問題対策と取り上げ方　田中　素子　45
自然、人間そして文明　西田　彩子　47
環境・公害問題—奇形ザルから水俣へ—　小林　睦　49

芝居考　高垣美成子　52
今、自分にとっての「水俣」　辻　孝司　53
自然の中の人間　北村　光子　55
“水俣”研究旅行の実感　大石　優香　56
3．ゼミ合宿運営後記　西村　由美・辻　啓之　58

Ⅲ．第五回深層心理研究会公開講座・公演会
1．新聞記事（朝日・神戸）
2．一人芝居「砂田 明の世界」への御招待　谷口　文章　66
3．ポスター・チケット・チラシ・パンフレット
ごあいさつ（以下パンフレットより）　70
プログラム　71
いきさつ　72
砂田 明氏紹介　73
作品解説　74
4．砂田 明論
文明と文化レベルにおける魂と演劇的知　谷口　文章　78
5．第五回公開講座報告　谷口　文章　81
◎公演会：夢幻能回想　西村　由美　82
：仮面（ペルソナ）のカタルシス　辻　啓之　83
：暗闇の幻影　井垣　博美　85
◎講演会：演劇と言霊　天野　雅夫　87
：砂田 明氏の演劇論　秋山　美紀　88
6．公演会運営後記　山下　智実　90

Ⅳ．学園生活の一風景
1．新入生に贈る言葉　谷口　文章
若き人々へ　94
新入生に―入門セミナー―　96
2．学園祭模擬店出店記　大江　正俊・井垣　博美　98

3．卒業旅行
南紀白浜への旅　辰巳　法光　100
卒業旅行顛末記　大内　雅勝　102
4．VTRの編集を終えて—水俣の記録—　岩田　哲郎　105

V．卒業論文
仮面と<おもて>　岡田ひでよ　108
クリムトとその時代　田中　素子　111
空間と人間の関係についての考察　天野　雅夫　114
『山の音』の信吾の生き方をめぐって　阪田　和子　116

VI．研究室活動内容
1．研究会発表　谷口　文章　122
題目：ミヒャエル・エンデのファンタジー界における「時間論」
2．講義概要　126
3．活動記録　128

編集後記　129

巻頭言

甲南大学　文学部助教授　谷口　文章

今年も別れと旅立ちの頃となりました。短くはこの一年、長くは四年間の研究、勉学、研修旅行、合宿などを共にしてきた若き魂との触れ合いも一区切りになろうとしています。これから、人生の新しい舞台でどのような感動のドラマを自らの力で展開していくのか、観劇席から楽しみに観ています。

この一年を振り返ってみて感じることは、研究室の活動がより社会的な方向へ移ったということですが、他方で着実に理論構築も進んでいるといえましょう。ロゴス中心の西洋の精密な考え方の修得だけでなく、東洋の思考法や感性・直感によって全体像を把握する練習も身につきつつあると確信します。

とりわけ、この一年の印象深い思い出は、夏合宿（8月16日～19日）で熊本県水俣市の水俣病センター相思社を訪れ、高倉史朗氏の講演「水俣病の歴史と現状」を聞き、患者さんたちに接し、さらに乙女塚で田上義春氏のお話や砂田 明氏の演劇に感動したことでした。それがきっかけとなり、12月23日（金）に「砂田 明・現代夢幻能―仮面のカタルシス―」（神戸文化小ホール）を主催する運びとなり、翌24日（土）は、深層心理研究会第5回公開講座「砂田 明の世界・私の演劇論」の開催になりました。合宿でお世話になった高倉、田上、相思社の皆様に、公演会を後援してくださった村島泰雄氏に、そしてなによりも砂田御夫妻に心より感謝いたします。

ところで、このような研修旅行による調査や記録を行わねばならない必然性は決して喜ばしい事柄ではありません。そのような人間疎外や社会問題が生じた原因の一つは、現代の知的パラダイムが実体論を中心として、真／偽，正／邪，理性／感情等々という二分法がなされ、対立項の一方が正しい、真なるもの、絶対根拠であるという合理的な論理が展開したためであるといえましょう。そのような知的パラダイムでは、個人においても、社会においても明るい世界は分析することはできても、暗い世界は照射できないでしょう。フロイトやユングによって個人の心の暗い世界に分析のメスが入れられるまでは、意識に現れた合理性こそが正しいものとされ、人間は明るい世界にのみ生きていると考えられました。しかしそのような暗い深層を認めない人間観のあり方は行きつくところ神経症や分裂病の多発という結果になりました。その意味で、フロイト・ユングの「人間の深層心理」学は多大な貢献をなしたと考えられます。他方、社会的には、アダム・スミス以来、経済の効率性を原理としながら利己心という欲求の体系が正しいものとされ（スミスは、本来そのようなことは言っておらず、

“道徳感情”によってブレーキがかかっていると主張しているはずですが—)、「欲求の神話」が誕生しました。その結果、公害、環境汚染・破壊問題を生み出しました。その意味から、個人の深層心理学を社会の深層構造の分析に適用される必要があるわけです。したがって、私たちに課せられた仕事は、「人間の深層心理と社会の深層構造」を正確に把握し、その論理を確立することであると思われます。このような問題意識を明確にして来年度の研究活動は行われることになるでしょう。

本年度もゼミの活動には、学生諸君が積極的に参加し運営してくれました。ゼミ幹事の西村由美、辻　啓之、公演会運営委員の山下智実、阪田和子、撮影記録係の岩田哲郎、天野雅夫、会計の小倉啓司、報告書編集長の榎本修一、卒業旅行の大内雅勝、呑海友子の諸君そしてゼミ生全員に感謝の気持ちを込めて、本当に御苦労様でした。

63年度ゼミ構成員

I

第十六回ゼミナール合宿（春季）

第十六回ゼミナール旅行研究発表会のお知らせ

例年になく暖かい日が続き、梅のつぼみもそろそろ膨らみ始めています。さて、一年間の成果を発表する恒例のゼミ旅行の日程を下記の通り計画しています。皆様の御参加をお待ち申し上げます。

甲南大学　文学部　谷口研究室
昭和63年1月18日

〜　記　〜

1.目　　的：研究発表・箱庭療法実習及び討論会（VTR使用）
2.日　　時：3月11日（金）〜3月13日（日）
3.宿 泊 地：関西地区大学セミナーハウス
神戸市北区道場町生野字ロクゴ318−2
☎（07956）4−4391
4.集合場所：JR宝塚駅　改札口　午前11時半集合
5.費　　用：15,000円
（5,000円を前金としてお送りください。）
6.携 帯 品：寝具、洗面具、その他
7.研究文献：哲学系　澤瀉久敬「医学の哲学」（誠信書房）
心理学系　岡田康伸「箱庭療法の基礎」（誠信書房）
教養系　木村　敏「時間と自己」（中公新書）
8.申込方法：申し込み用紙を前金とともに2月25日までに下記へお送りください。
〒651 神戸市中央区布引町2−1−35
山下　智実

9.問合わせ：ゼミ旅行幹事
山下　智実　☎（078）−241−4043
真子　恵美　☎（0720）−56−2323
谷口　文章先生　☎（07712）−3−9464

解説：“脳死”についての討論会と箱庭実習

谷口　文章

現代文明の発達がもたらした恩恵は、どのようなものであっただろうか。人々の心を豊かにし、より大きな幸福をもたらしたといえるだろうか。例えば、現代医学を考えてみるとき、脳死をめぐる議論はまさに象徴的である。死の定義・判定基準（ひるがえってそれは生の問題でもある）、それによって生じ得る臓器移植の是非、臓器の提供者（ドナー）と受け取る側（レシピエント）の心理的問題、法律上の解釈の問題などが、その中心テーマとなっている。現代医学がもたらした“脳死”の問題は、“自然死”が人々に認められている間は生じ得ないものであった。現代医学はその自然死を変容させて、死の判定を早め、臓器の死をむこうに押しやることにより、生と死の虚無な空間地帯を作ることになった。充実した生でもなければ、成就された死でもない“虚無な無風地帯”に医学のメスの活躍する場ができたわけである。そこに、ドナーはもちろんのこと、医者、レシピエント、家族、法律が絡み合ってくる。自然からはるかにかけ離れた人間の悲喜劇が展開する。つまり、虚無な無風地帯において、人間はどのように主体的に生き、死ぬべきだというのであろうか。現代文明は人間に恩恵をもたらしたというよりも、心のあるべき場所を喪失させたと言ってもよいかもしれない。

さて、自然から遊離した「人間本性＝人間的自然 human nature」を回復するために考案された心理療法の技法の一つが、箱庭療法である。ロゴスの明るい光で照射され続けたため、生命が根づくマクロコスモスという自然の土が硬化し、同時にその中に生きるミクロコスモス（＝人間的自然）も石化してしまった。そうした現代人の心も、人為的にではあれ、箱庭の砂やオモチャなどを使ってファンタジーの世界に入ることで、その自然性と人間性を回復できるのである。すなわち、箱庭というパラコスモス（疑似宇宙）の体験を通じて、虚無な石化した世界に生命の泉が涌き出すと考えられよう。そうして、明るいがしかし硬化する可能性のあるロゴスの世界だけでなく、暗いがしかし潤いのあるシンボルの世界も含めたトータルなコスモスが実現されるのである。

以上のことから、私たちは現代人の諸問題を、一例として“脳死”問題を採り挙げて討論し、その問題の位置付けを明らかにしながら、他方、実践的な実習として箱庭療法を体験したのである。また、間で卒業論文の要旨の報告もあり、充実した合宿となった。

討論会

“脳死”について——討論会報告——

甲南大学大学院　社会科学研究科　法学専攻二回生　北村　真

一、今回のゼミ合宿での討論会のテーマは“脳死”についてであった。まず、NNNドキュメント'88「『脳死』～阪大特救部からの報告～」（日本テレビ）及び同「特集『生命と移植』天国へ持っていかないで～米国移植医療最前線～」の二本のビデオを見たうえで、三つのグループに分かれてディスカッションを行なった。そして各グループのディスカッションの内容の報告が行なわれ、全員で『脳死』について改めてディスカッションを行なった。

二、「『脳死』～阪大特救部からの報告～」は、大阪大学医学部付属病院の特殊救急部に運び込まれた二人の少年、チネン・タダシ君（13オ）とフジイ・アキラ君（16オ）の治療の動向を中心に、『脳死』に関する各関係者の考えを紹介したものであった。

タダシ君はオートバイの事故で阪大病院特救部に運び込まれた。彼はそのとき既に脳挫傷により脳が腫れ上がるという脳腫脹という状態にあり、いわゆる“脳死”状態にあった。そのため彼は自発呼吸ができず、人口呼吸器（レスピュレーター）によって心臓を動かしている状態であった。しかし、彼の顔色や皮膚の色はつややかで、普通の人が眠っているのと差がないという。彼の担当の医者は「100%助からないとは言えない」というものの、「経験的に言って彼の状態になれば10日から2週間で心臓が止まるであろうという状態である」と家族に説明する。そして彼の命はそれから2週間しかもたなかった。担当医の「残念ですが御臨終です」という言葉、そしてモニターを切ったときのピーという音が響く。彼の父親は「医者は精一杯やってくれた。あきらめがつく」と言う。そして「ダメだと分かっていても生きていてくれたほうがいい」と言うのである。

アキラ君もオートバイ事故で阪大病院特救部に運び込まれた。彼は、くも膜下出血のために血液で脳が圧迫されている状態にあった。“脳死”状態の直前にある。脳圧を下げるために頭蓋骨を切開し、その中にある血液を取り出さなければならない。手術は成功し、彼はリハビリテーションを続けている。彼の母親は「もしタダシ君が脳死でもう死んでいますと言われたらどうしますか」という質問に対し、「絶対に『はいそうですか』とは言えない。心臓は動いているんですから。いつかお母さんと呼んでくれることを信じたい」と涙声で言う。

『脳死』の著者である立花隆氏は「現在の脳死の定義が脳機能の

『不可逆的停止』でとどまっている。生物学的に脳の死という状態は存在する。現在の脳死の定義はそこまでいかないで脳の機能が後戻り出来ない状態をもって脳死としている。」という。氏の考えでは機能停止と死とは違うということらしい。現在の“脳死”の定義では早すぎるというのである。

これに対し阪大特救部の杉本侃教授は「人が人である所以は、脳が活動していることである。従って脳が死ねばそれは人の死ということになる。そこでの問題は適切な治療が行なわれたかどうかであって、その後の問題は重要ではない」という。そして「医者の間では20年も前から脳死についての基準があり、今回の厚生省の判定基準もアメリカで主な行なわれているのとほぼ同じである。」と述べ、積極的に脳死、そして臓器移植を推進する。

また医療過誤問題に積極的に取り組む弁護士の弘中惇一郎弁護士は「人の死という重要な問題は誰が見ても分かるようなものでなければならない。それには現在の三徴候説で十分であり、これに従えば誰にでも死んだとわかる。しかし脳死を認めると死の判断は医者の判断に従うことになり、時間的に流動的になる。そのため法律の問題としては相続や刑法に重大な混乱を引き起こすことになる。」という。

1983年日本医師会生命倫理懇談会は「脳死は人間の死である」という『脳死及び臓器移植についての最終報告』を発表した。その発表において「人為的な措置によって脳以外の臓器の機能を維持させてパイプにつながれて死んで行く事実上の死者を生きているかのように扱って果たして良いのか。もしＩＣＵで脳の死という状態で３日も４日もパイプにつながれて死んで行く人を見てどのように思うか」そして「『死をむかえる』ということは『人の尊厳』ということにつながる重要な問題である。我々は『死の尊厳』を侵すわけには行かない」というコメントがなされた。

この生命倫理懇談会の最終報告書が出されたことですべての問題が解決されたわけではない。それにもかかわらず、多くの医療機関で臓器移植の動きが慌ただしくなってきている。しかし、他方日本移植学会において臓器移植について紛糾していた。これは昭和58年に筑波大学で行なわれた「膵臓・腎臓同時移植」について争われたのである。脳死反対の医者から“脳死”について「社会的合意がまだない」「判定基準があいまいである」等の指摘がなされているのである。脳死状態におちいったタダシ君は２週間で死に、脳死の直前の状態で止どまっていたアキラ君はリハビリを続けている。

三、「特集『生命と移植』天国へ持っていかないで～米国移植医療最前線～」は臓器移植が頻繁に行なわれているアメリカ、ウィスコンシン州立大学病院おいて、先天性たん道閉鎖症で肝臓移植を受けなければならないイチハラ・マチコちゃん（８オ）の肝臓移植の様子を中心に、移植を受ける側、受けた側そして移植を行なう立場を紹介するも

のであった。
マチコちゃんは、ウィスコンシン州立大学の臓器移植コーディネーターであるボブ・ホフマンのもとで肝臓の移植手術を受けた。手術を受けなければ2カ月で死んでしまう状態にあったという。アイオワに肝臓を提供してくれるドナーが見つかりマチコちゃんに移植された。手術前は大きなおなかをしたマチコちゃんが、手術が終わった後は、普通の状態に戻っていた。また、アイオワまで肝臓を取りに行くと同じドナーから心臓をもらいにニューヨークからも医者が来ていた。
アメリカでは、臓器の移植を待つ患者3万人が登録されている全米ネットワークがあるという。また移植手術が行なわれている多くの州では、脳死に陥った患者の家族に対して、臓器移植を求めることを担当の医者に義務づけているということである。そして、手術室には「Don't Take Your Organs To Heaven...Heaven Knows We Need Them Here.」と書かれていた。
ミルウォーキーで看護婦をするダーシー・ウェーバーさん（21才）は5年前に腎臓の移植を受けたが、そのときのことを知りたくて看護婦になったと言う。そして「健康な臓器を土の中に埋めてしまうのはもったいない」という。またラディック一家のジョン君（2才）は生まれて6カ月で肝臓の移植手術を受けた。その母親のメアリーさんは「他人の不幸によって初めて可能になるのであって、その家族の気持ちを考えるととても複雑です。しかし移植手術をしないでは誰も助けられない。臓器は死んで残せる最大の贈り物です」という。ジョン君は今は元気に遊んでいる。ジョン君と同じときに肝臓移植を受けたタカハシ・ミカちゃん（10才）も今は元気に遊んでいる。ミカちゃんの両親は「これしかない、これなら助かる道がある、と思ってそれに飛び付いた」という。
マチコちゃんの肝臓移植担当医であるムンジ・ワラヨグル教授は「日本人は英語ができないのでかわいそうである。しかし、同時にアメリカの経済的、肉体的、精神的負担は大きい。日本では何故移植をしないのか。宗教、慣習の違いなのか。それは教育やマスコミで何とかなるのではないか。1人の脳死者で二つの腎臓、一つの心臓、一つの肝臓と少なくとも4人の人が助かります」と言う。また外科部長のF．ベルツアー教授は「現在アメリカでも臓器不足になっている。すべての外国人を受け入れていたらアメリカ人の分が足りなくなる。外国人の要求を受け入れないわけではないが、アメリカの移植外科学会は現在、外国人を移植者の5％以内において認めている」という。
臓器移植により多くの人が助かっていることは事実である。そして多くの人が今臓器の移植を受ければ生きられるという状態にある。しかしそのことで、直ちに何人かの人の死期の早まることを認めて良いものであろうか。
四、残念なことに我々は今回のゼミ合宿でこれらのビデオを見るまで

は“脳死”について殆ど知識をもっていなかった。そのために討論会における議論も多くの疑問点が集約されるというものにとどまった。ただこれを機会に脳死という問題について考えるきっかけを得たわけであり、また人間の「生命」そして「死」という問題を考える若干のキッカケを得たと思われる。しかし今もって脳死について考えられるだけの十分な知識があるとは言えないであろう。そこで、今後、脳死の問題を考えることができるために、この機会に脳死に関する最低限の知識と問題点を簡単に整理しておきたい。

まず、脳死とはそもそもどのような状態を指すのであろうか。1968年日本脳波学会の「脳死と脳波に関する委員会」は次のように“脳死”を定義した。すなわち「①脳死とは、回復不可能な脳機能の喪失をいう。②脳機能には、大脳半球のみでなく、脳幹の機能も含まれる。」というのである。しかし、この定義自体にも問題がないわけではない。機能停止と死とはちがうというのである。しかし現在、脳死に関する議論はこの定義を前提に議論されているということであるから、我々としてはまずこのことだけを理解しておくことにする。ただここで気を付けなければならないのは“脳死”と“植物人間”とは異なるのである。つまり、“植物人間”は大脳は機能停止したが、脳幹は生きている状態の患者なのである。そのため植物状態の患者は、自分で呼吸をし、自分で血圧などもコントロールしている。栄養さえ補給してやれば自分で立派に生きていられるのである。

では“脳死”はどのようにして判断されるのであろうか。従来の死の判定はいわゆる三徴候説というものに従っていた。すなわち「①心臓停止②呼吸停止③瞳孔拡大」である。ところが脳死に関しては昭和60年12月に厚生省の「脳死に関する研究班」が最終報告書を出した。それによると脳死の判定基準として「①深昏睡②自発呼吸の消失③瞳孔が固定し、瞳孔径が左右とも4ミリ以上になる④対光反射、角膜反射、毛様脊髄反射、眼球頭反射、前庭反射、咽頭反射、咳反射の消失⑤平坦脳波⑥以上の条件が満たされた後、6時間以上みて変化がない」というものであった。

通常の人間の死に至る経過というのは、まず心臓死がおき、心臓が停止すれば、全身の血流が止まり、そして当然脳にも血液が行かなくなる。そうなると間もなく脳の機能は全面的かつ不可逆的に停止し、脳死に至る。この意味の脳死であれば万人に起きる。しかしこの意味での脳死は心臓死の結果として起きるもので、死後の現象にしか過ぎない。普通、人が死ぬときはこのように心臓死が先にきて、その結果として脳死が発生する。ところがごく稀なケースとして脳死が先に起こり心臓死が後から起こる場合がある。すなわち脳に外科的あるいは内科的に重大な損傷が起きた場合である。具体的には、交通事故、転落事故などで頭を強く打って脳挫傷を起こしたとか、犯罪や自殺でピストルで頭をブチ抜いたとか、あるいは脳内出血、脳梗塞、脳腫瘍な

どの病気、または一酸化炭素などの毒物の作用などによる損傷が考えられる。そしてこのような損傷が生じた結果として全脳の機能が完全に停止してしまうことが必要である。ただこのような状態を放って置くと、僅かな時間で心臓も停止してしまい、人は心臓死を迎えることになる。したがってこのように僅かな時間しか継続しないケースでは、ここで問題になっている脳死は実際上は殆ど問題にならない。実際に問題となる脳死は、脳が損傷し機能が完全に停止した状態で、人工呼吸器を付けて心臓に人工的に酸素を供給することにより一定時間継続する脳死状態なのである。別名レスピュレーター・ブレインという名のとおり、人工呼吸器があって初めて“脳死”は生じるのである。したがって脳死は人工呼吸器なしには発生しないものであり、すべての人が脳死になるわけではないのである。

しかし一旦、脳死の状態になれば、現在の医学の水準からすれば確実に1週間から10日で心臓死を迎えるとされている。

五、では、この“脳死”の問題を我々はどのような観点から考えれば良いのであろうか。

個人的なレベルで考えれば、自分がそのような状態になったときに死んだものとされて自分の臓器が他の人に移植される可能性を認められるか、また自分の家族がそのような状態に陥ったときに、それを“死”と認めることができるかということになると思われる。“脳死”が死となれば、そこにあるのは死体であって、それに人工呼吸器をつけ、死体の胸を器械の力で強制的に動かすというのは、むしろ死者の尊厳を傷付けているということになろう。これはまさに人の「死の尊厳」をどのように考えるかという問題につながってくる。これに対し、社会的なレベルで考えると、今まで人工呼吸器につながれた状態で生きているとされていた人を「死者」と認める社会的なコンセンサスが得られたと言えるだけ、「『脳死』が死である」という社会的な合意を得たとできるかということである。たとえば今回のビデオの中でアキラ君の母親が“脳死”でも「まだ生きているのですから」と言っていたが、それは社会的にはナンセンスなものとなってしまう。

また法律的な観点で考えるのならばどうなるか。医者の関係では、“脳死”者を死者として扱ってメスを入れることが、殺人罪として責任を問われないか、また医療過誤として損害賠償責任を問われないかという、「免責」の有無の問題になる。この責任の有無によって医者は臓器移植が可能か不可能かを考えることになる。脳死者の立場では死の限界がいつになるか、その家族においては相続の時期の問題が生じる。臓器移植を受ける者の立場では、誰がその臓器を得ることができるのか優先権の争い、レシピエントの選択が問題になろう。ただこれらの法律的問題は、脳死を死と認めるか否かという選択をすれば事後的に解決される問題である。

さてこの問題について我々はどのように考えれば良いのであろうか。

今後私がまだ若く、人から臓器を貰えれば更に生き続けられるのであれば、若干の抵抗はあるが、やはり生き続けたいと思うであろう。また私が脳死状態になり近いうちに心臓死を迎えるのが確実というのが明らかであれば、自分の臓器を他の人に提供することに私個人としては現時点では異存がない。しかし、脳死が多くの場合、突然の事故などで起きるというのであれば、自分の身近な人が突然脳死に陥り、その場の選択を迫られたならば『脳死』を死と認める選択ができるかどうか自信がない。

更に最大の問題は、厚生省の研究班による“脳死の基準”は明らかにされたが、それを具体的に患者にあてはめて判断するのは現場の医者である。その現場の医者の判断をどこまで信用できるかである。現在でも多くの医療過誤事件が起きている。脳死の判断は素人には判断できない。医者の判断を信じるしかない。それも突発的な状態で、限られた時間内でなされる判断についてである。医者の判断のもとに命が助かるかも知れない人がいるとしても、密室の中の医者のそのような判断のリスクを負担するほどの勇気はない。現時点では私としてはそのように考えるしかない。

六、日本で最初に心臓移植が行われたのは昭和43年であった。札幌医科大学で和田寿郎教授によって行われた。そのとき心臓移植を受けたミヤザキ少年は手術後83日目で死亡した。執刀医である和田教授は、心臓の提供者の死について殺人罪で告発された。教授は結局「心臓にメスを入れた段階でドナーが生存していたことを証明する証拠がない」として昭和45年に札幌地方検察庁において不起訴決定処分がなされた。

その後、我が国では臓器移植は行なわれなかったが、昭和59年9月に筑波大学で膵臓・腎臓の同時移植が行なわれた。この手術については昭和60年2月に東大の医師グループなどが、当該医者らを殺人罪、死体損壊罪、虚偽公文書作成罪に該当するとして告発した。この移植手術においては、医者はドナーの夫から承諾書を取り付けたうえで、先に述べた“脳死の基準”に該当するものとして行なわれたものである。検察庁はこの手術について、捜査を完了し現在最終処分を検討中であるとのことである。検察庁の処分が出れば、それは医者以外の立場からの最初の公的な見解である。その処分の結果にとりあえずは注目したい。

＜参考文献＞

立花 隆『脳死』（中央公論社、1986年）
立花 隆『脳死再論』（中央公論社、1988年）
竹内一夫『脳死とはなにか～基本的な理解を深めるために～』（1987年、講談社）
森岡正博『脳死の人～生命学の視点から～』（1989年、東京書籍）

脳死とそれをめぐる生と死——臓器移植を背景として——

大阪大学大学院　医学研究科　修士一回生　小谷　英子

「脳死」状態とは、蘇生術の進歩と人工呼吸器の普及によって脳の機能が停止したあとも心臓・肺が動き続けること、言い換えると今世紀の中頃から種々の生命維持手段によって出現した「臨床的医原病」（イリッチ）の一つである。古くから「息をひきとる」「脈がふれない」「冷たくなる」などが死の徴とみなされ、医学的にもこれらの表現を包括する、いわゆる「死の三徴候」（呼吸停止・心拍停止・瞳孔散大）が客観的な死の示標として用いられてきた。しかし、脳死状態は従来の死の概念に当てはまらない。何故なら、息はひきとらず、脈もふれ、体温も残っており、唯一瞳孔散大を示すだけだからである。それゆえこのような状態は、「生きた身体に死んだ脳 a dead brain in a living body」とか「脈のふれる死体 corpses with a good volume pulse」と言われる。

脳死状態の患者も、判定が誤ってなければ、やがて脳細胞が自己融解し、必然的に心停止を迎える。けれども、脳の機能停止と心停止との間で時間的な幅を生じることは、人工呼吸器出現以前にはありえなかった現象である。この状態は、発見された当初しばらく「超昏睡 le coma dépassé」あるいは「不可逆性昏睡 irreversibule coma」と呼ばれていた。しかし、1967年のバーナードによる心臓移植手術以降、「脳死 brain death」としてとらえられるようになった。そして、臓器移植を背景としながら、脳という一つの「臓器の死」のレベルから一人の人間の「個体の死」のレベルへと概念の拡大化が行われた。すなわち、「脳死状態 brain death state」あるいは「脳死症候群 brain death syndrom」とみなされていたものが、臓器という医療資源の供給の必要性とともに、「脳死即個体死」を意味するようになったのである。

第十六回ゼミ合宿では、『脳死』についてのディスカッションを「脳死～阪大特救部からの報告～」「天国へ持っていかないで～米国の臓器移植最前線」の二本のＶＴＲを見ながら行った（当時甲南大学理学部在籍）。私の参加したグループでは、一方で脳死を＜個体死として認めたい＞という意見として、「尊厳死である」「移植を受けたい（受けさせたい）と思う」「移植によって生命のつながりが保てる」「移植によって人の役にたてる」などがでた。他方で＜認めたくない＞という意見としては、「出来る限り治療を続けてほしい」「かけがえのない人の死を認めるのに時間がほしい」「移植に使われるのは感情的、生理的に受け容れられない」「死は自然なもので、人間の判定が介入するのはおかしい」などがでた。私たちのグループでは、片方の見解に立つ人はほとんどなく、各自において葛藤があり、立場に応じて対応もかわるという人もいた。理性的側面において科学的ある

いは功利的立場に基づく脳死の概念を理解できたとしても、より深く根をおろした感情のどこかで納得できないものがグループ全員に残っていた。

ここで、脳死とそれをめぐる様々な生死について、その背景の臓器移植とともに考えてみよう。「わたくし」の生死すなわち「一人称」の生死について考える場合と、家族・恋人・友人など「あなた」の生死すなわち「二人称」の生死について考える場合と、第三者の立場として「（匿名の）誰か」の生死すなわち「三人称」の生死について考える場合とでは、自然と意見もちがってくる。さらに、ドナー（臓器を提供する人で、脳死判定を受ける主な人）側の立場を考えるか、あるいはレシピエント（臓器を受け取る人）側の立場を考えるかでも大きく異なる。これらのことを考慮した上で、三、二、一人称の順に論じていこう。

第一に「三人称」の生死としてこれらの問題を考える近代医学の立場をみてみよう。まず医学体系としての知識・技術面から照らしてみると、脳死の判定基準は、各国・各施設において統一されたものではない。このような判定の混乱は、脳蘇生の限界点 point of no return を蘇生可能な脳の不全状態と心停止との間に仮定したことに由来し、判定が唯一絶対的なものでないことを意味している。脳の「不可逆的な」機能喪失状態の確認は、現代医学によって可能であろうか。答えは否である。経験の学としての医学に、また複雑多様な心身を備えた人間を対象とする医学に、100%の見通しを私たちは期待するべきでないのである。医学は常に新たな理論・技術を獲得し続け、その対応は現時点での予測に基づくものに過ぎないのであり、また人間の多様性に対応するには医師の直観にたよるしかないのである。医学の知識・技術は、それらに対する有効性と限界を、期待的過大評価ではなく、適切に評価した上で選択しなければならないだろう。

次に倫理面からこれらの問題を探ってみよう。医学における行動原理あるいは価値基準は、患者を救うことである。そのため医学はあらゆる知識・技術を患者に注ぎ込んできた。それが善なる行為とされることは、医学の知識・技術がずっと未熟であった頃、あるいは感染症や栄養不良が主な疾病であった頃、疑う余地はなかった。しかし今はどうであろう。医学は生と死のコントロールまでも手にし、また一方で疾病構造は治療不可能な慢性疾患や変性疾患などが主となってきている。これらに伴って、延命のみならず、痛みの制御や生命・生活 life の質的な面が重視され、さらに尊厳死・自然死が話題となってきている。今やもう一度、患者にとっての救いとはどういうことなのかを踏まえた上で、医学は治療と看護について問い直さなければならないだろう。

私たちは脳死・臓器移植を通じて、近代医学の抱える問題の縮図を具体的に見ることができる。例えばドナーの安らかな死について、あ

るいはレシピエントのより充実した生について、考えなければならないのである。何故なら医学は人間のためのものであり、決して人間を道具として用いてはならず目的そのものであることを忘れてはならないからである。人間の医学である限り、科学と同時に哲学がその中に不可欠である。「科学なき医学は力不足であり、哲学なき医学は意味不足である」と高島・フランクルによって提唱されるように、手段は価値づけられてはじめて、人々の幸福に役立つのである。人間は個のみで存在するのではなく、環境の中に布置され、両者の相互作用の中に生きている。そこで、生死のことがらは、科学的事実である以上に、歴史的、文化的、社会的問題となる。科学による事実の記述は万国共通であるが、その意味や価値は、固有の風俗習慣・宗教・倫理観・家族制度・死生観という文脈の中で様々である。こうした視点でも、これらの問題について考えなくてはならないだろう。

第二に「二人称」の生死の典型として家族の立場についてみていこう。脳死状態を迎えた患者の家族は、愛する人を失いつつあるという思いから、ある家族は納得いくまでの治療を医師に望み、ある家族はせめて他人の中で生き続けてほしいとドナーとなることを承諾する。また移植の順番をまっている患者の家族は、愛する人を助けてほしい一心でその機会を待ち望んでいる。それぞれの気持ちに私たち誰もが共感できるであろう。しかし、移植を介して同じ土俵に乗るとき、ドナー側とレシピエント側は対立せざるをえない。この時脳死判定は、ドナーの「個体の死」を早めることで、ドナーの「臓器の生」と、レシピエントの命を保つ働きをする。まさにドナーとレシピエントの生の相剋である。

生きる権利は最期の一瞬までその人自身のものであるが、翻って「安らかな死を迎える権利も誰もが犯せないものではないのだろうか」という疑問が湧き起こってくる。日本の場合、とかく個人は集団の一部とみなされて、家族の意志（さらにはより強い権威を持つ集団）の中へ個人の意志は圧殺されてしまうことが多い。二者関係にしても、対等な「我＝汝」の関係でなく、「我＞我の汝」という独特な運命共同体関係である。けれども忘れてはならないのは、どのような文化的背景であれ、実存的に人生という道を歩くには自身の足で歩むしかないということである。自分自身の生と死を見つめない人は、他人の生と死を見つめること、すなわち自分と同じ重さで他人の存在を大切にすることはできない。愛する人を真に生かす原点は、愛を押しつけることではなくて、「みまもり」のまなざしをもつことなのではないか。

そこで、最後に「一人称」の生死について脳死をめぐる問題を考え、結論としたい。脳死＝個体死とした上での臓器移植を、日本において従来の歴史的、文化的、社会的流れからは多くの障害があるにもかかわらず、強行に実施しようとする動きがある。その理由は様々であるが、一つにはそれを残された最後の治療として望んでいる患者がいる

という事実である。確実に訪れる死への不安をもつ人は誰しも、同時に生に対する盲目的な意欲をもっている。人間が避けられない生と死の事実に直面したとき、死を超えうる限りない生命の把握を求める努力が始まる。その結果、多様な死生観が生まれた。これを岸本は以下四つの類型に概括している。

（１）肉体的生命の存続を希求する
（２）死後の生命の永存を信ずる
（３）自己の生命をそれに代わる限りなき生命に託する
（４）現実の生活の中に永遠の生命を感得する

臓器移植を望むという対応は、上の類型に従うと（１）に基づくと考えられる。近代医学は病者を抽象化して病気をとらえ、特に外科学は病む部分を身体に局在化して、そこを除去あるいは交換する治療を行ってきた。このような機械の修理になぞらえられる治療は、不老不死を願うかのようである。まさに臓器移植は外科を中心とした近代医学を象徴する治療である。しかし、人々の望む「充実した人生」に人生の長さ quantity of life は必要十分条件であろうか。もしそうなら、一体いつまで延命すれば私たちは満足するのだろうか。また、生前ドナーとなることを希望する人の姿勢は是非もないが、他人の生との引き替えである臓器移植を望まねばならないという状況を、自らの生と死と同じくドナーの生と死を考えたとき、私たちは受け容れられるのだろうか。

私たちの願いは人生を自ら歩み、意味ある生の実感の中で日々を過ごすことであり、生（はじめ）と死（おわり）もない永劫回帰の虚無の中をさまようことではないのである。死の不安は、死に至るまでの苦痛や死後の運命の不可知以上に、死による別離、過去の罪悪感、自己の存在の不確かさなどによると考えられるが、これらは翻えって死による生の意味づけ、すなわち「死の意味」をも示している。死は、生に独自性と一回性を与える。誰でもない自分自身の一回限りの人生は、死に支えられて、かけがえのないものになる。限られた人生の中で、すなわち限られた状況であるがゆえに、「いかに生きるのか」を人生から問われ、私たちの生は輝くのである。脳死とそれをめぐる生死を考える私たちは、こうした根本的な問いかけの前に立ち止まり、さらに一歩自ら踏み込むことが、今、必要となっているのではないだろうか。

＜参考文献＞

１，竹内一夫「脳死とはなにか」（講談社）
２．東大PRC企画委員会「脳死」（技術と人間）
３，中川米造「サービスとしての医療～医療のパラダイム転換～」（農文協）
４．フランクル，高島博他共訳「現代人の病～心理療法と実存哲学」（丸善）

5，岸本英夫「死を見つめる心」（講談社）

脳死についてのグループ討論会でかわされた議論について

神戸大学大学院　農学部　修士一回生　植木　通博

春合宿で行われたグループ討論会の中での脳死をテーマとした議論について報告します。

最初に、討論を行う上での素材として、脳死患者からの心臓提供を待つアメリカの心臓病の少年を取りあげたドキュメンタリー番組を、全員で視ました。そのあと、１０人前後の３つのグループに分かれてグループ討論を行いました。

報告者の参加したグループでは、脳死とは何か、植物状態の人間とはどう違うのかを簡単に補足説明した後、まず脳死という考え方に賛成か否かを挙手してもらいました。その結果、７人が脳死を肯定しました。　次に、各自の意見を順番に述べてもらった後に、自由討論に移りました。おもしろいことに、討論を進めてゆくうち、最初肯定的な立場であった人からも、脳死に対する疑問が出てくるという現象が見られました。

報告者の参加したグループでかわされた議論を要約すると次のようになります。

脳死について肯定的な立場からは、機械によって生かされている状態は不自然であり「生きている」とは認めがたいといった意見や、死の判定の基準は臓器提供者（ドナー）自身が決めるべきであって、もしドナーが脳死を肯定するならばそれは認められるべきだという主張が示されました。後者に対しては、実際問題として、脳死寸前の患者は自らの意志を示すことができないのではないか、という反論もありました。

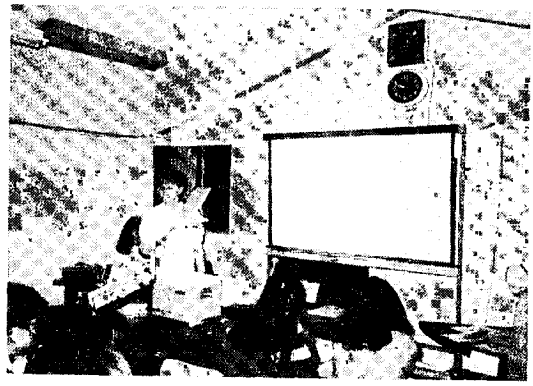
逆に、脳死に対して否定的な立場からは、脳以外では生命活動を行っている脳死状態は、やはり「死」としては認めがたく、従来からの心臓死を基準とすべきだという意見や、日本の現状では、脳死という考え方はまだ社会的に認知されていないという主張が示されました。

さらに、患者が脳死状態で生きつづけることが本人にとって果たして幸福といえるのだろうか、といった「安楽死」の問題へつながるような考えを述べる人もいました。

この他にも様々な意見が出て活発な討論が行われましたが、時間の関係もあり、結論的な意見に全体を集約することはできず、各自の脳死問題の考え方を提示しあうことにとどまりました。

３つのグループの意見を発表しあったあと、最後に谷口先生が「脳死を認めるか否かという問いは、簡単に解答の出る問題ではなく、医

学のみならず法学・社会学・心理学・哲学さらには個々人の宗教観といった多領域の分野にまたがる重層的・複合的な問題群の集合体であると考えられます。『死』について語ることは、『生きている』われわれにとっていかにむずかしいかが、討論を通じて理解できたのではないかと思います」と、総括されました。



一瞬と永遠——その間に浮かぶ自己存在をめぐって——

甲南大学　理学部　二回生　西村　由美

広大な世界時間の流れのなかでは、人間の一生など一瞬の明滅にすぎないかもしれない。けれども、“私が今ここに在る”という前提があってこそ、自己にとって世界は意味あるものとなるように思われる。また、物理的には万人に均質な時間の中で、人は世界との関わりを通してそれぞれ特別な時間を生きていると言えるのではないか。そこで、“自己が生きている時間”を中心として考えを進めてみたい。

世界時間と交わりながら展開する“自己が生きている時間”は、自己の存在点である現在を中心として、過去・現在・未来の三つの部分に区別される。主体としての自己が生きられるのは、“いま”（現在）という一瞬にすぎないが、過ぎ去りし“いま”としての過去、未だ来たらぬ“いま”としての未来を抱きこんでいるのがその現在ではないのだろうか。“いま”は確かに未来と過去のあいだにはさまれた一瞬にすぎないけれども、自己にとってはその“いま”こそが、無限の可能性を秘めた存在として感じられるのである。

「いまとは、未来と過去、いまからといままでとを、それ自身から分泌するような、未来と過去とのあいだなのである。」（注①）あいだとしての現在にしか生きられない自己存在を考えるとき、“いま”が未来と過去を創り出すことが納得できる。つまり、我々の時間把握は、“いま”の自分が“いままで”の自分や“いまから”の自分に関して、自分自身とどのようにかかわり、自分自身をどのように見出すのかという、自己措定のあり方に他ならない。だからこそ、“私が今ここに在る”という大前提が揺らぎ、有限存在である自己がその終わりである死を迎えるとき、“自己の生きられる時間”も幕を閉じるのである。いずれ死すべき有限な存在である自己は、その有限性故に、生と死、無限・永遠ということを考えざるを得ないのではないか。

自己が死を見つめるとき、そこに必ず生が共存していることが見出せる。死が生の中に、生が死の中に深くくい込んでいるために、生と死のどちらに注目しても、有限でありながら今生きているということが浮かび上がる。「人間の有限な自己にとっては、自己が自己でありうるためには、自己は自己自身とかかわらねばならず、自己自身によって触発されなくてはならない。」（注②）これらのことより、“自己の生きられる時間”を知るためには、まず自己措定について考える必要があることがわかる。

キルケゴールは「自己とは自己自身に関係するところの関係である。人間は有限性と無限性との、時間的なるものと永遠的なるものとの、自由と必然との、総合である。要するに人間とは総合である。総合とは二つのものの間の関係である。」（注③）と述べる。人間は有限と無限、時間と永遠を越えるところの存在であり、総合的な存在なのだ。

人間は、この総合を見出すために生きていると言えるし、自己関係を深く考察することがよく生きることだと言えるだろう。有限な存在である人間は、自己が自己自身でありえた瞬間に、無限・永遠を越え、あらゆる対立概念を越えたところの「永遠の現在」（注④）を生きるのだろう。この瞬間、意識は無限に高まり、厚み、深みのある一瞬として、永遠に生命に記憶されつづけるのではないだろうか。

われわれの存在の豊かさの全体は、日常的な時間のみからできあがっているものではない。非日常的な、その一瞬こそが　生命に本来の輝きを取り戻しているのではないか。「その時、私は宇宙と無限の関係に立ち、一切の魂と美しい調和に抱き合うのではないであろうか。なぜならそのとき私は、どのような無限のものもその中では与えられない時間的世界を超越して、宇宙の創造の中心に自己の中心を横たえているのであるから。」（注⑤）

春夏秋冬の四季の移ろいのなかに、喜びをみるも、哀しみをみるも、人の心の有りようである。私たちは、世界時間と内的時間との交差点として宇宙の中心に存在し、各人にとって特別な“自己の生きている時間”の主人公である。心身一元的な存在である自己にとっては、生きられる時間と空間は区別することができない。それらは、一つの体験として自己の内に同一化されるものである。人と人との間に生き、人と共有の体験を持つことによって、自己の世界はさらに広がり、輝きだすのではないであろうか。私たちは、私がここに立ち会っていることを喜びつつ、いまを限りなく豊かに生きなければならない。

＜注＞

①木村 敏著『時間と自己』（中公新書）（P.29）
②同上（P.177）
③キルケゴール著『死に至る病』（岩波文庫）（P.20）
④木村，上掲書（P.141）
⑤三木 清著『人生論ノート』（岩波文庫）（P.146）

脳の働きと「こと・もの」的見方

甲南大学　文学部　四回生　辰巳　法光

まず、最初に「こと」的見方と「もの」的見方について述べたいと思う。私達が何かをとらえて言葉にするとき、それまで「こと」であった何かは「もの」として、言葉の中に閉じ込められてしまう。つまり、「もの」として客観的にとらえた瞬間に「こと」は「こと」であることを止めてしまう。「もの」は私達の世界空間を満たしている。常に客観的に見る限り対象化された「もの」は不動の「もの」であっ

て変化することはない。しかし、そのような「もの」は「こと」として捉えることもできる。例えば映画を見ているうちに、いつのまにか引き込まれてしまうというのがその例だろう。始めは映画という「もの」を見ていたはずなのに、次第に自分を主人公にオーバーラップさせて感動し主人公に共感してしまう（主客合一の状態）。そこには自分と主人公の境界はみられない。

ところで、この「もの」的見方が、世界や自然から一定の距離を取り客観的に対象化・抽象化してとらえるという思考法であることから、これは極めてロゴス的であり、またこれが西洋の伝統的思考法を代表する科学的・合理的世界観の根底にあることは言うまでもない。それにくらべて日本人は、「形なき形を見、声なき声を聴く」「こと」的世界を体験してきたのである。事態としての「こと」は対象としての「もの」と違って常に変化し続け、ゆえに、いつも一定の距離をとって分析してみることは出来ない。おもしろいのは西洋の「もの」的見方と日本の「こと」的見方の違いがはっきり文化として現れていることである。西洋的思考方法の「もの」的な自然観では自然と戦い自然を征服するという思想が生まれる。つまり、理性によって自然を客体としてとらえ、これ生命のない物質とみなす。その結果自然を征服して人の役に立てる知性主義の思想が、結実し、生き生きと感性的な自然を文化とする「こと」的な東洋的思考方法とは対立したものとなる。

いうまでもなく、「こと」的見方をする傾向のある日本人は、自然に順応し、いかに自然との調和をはかるかという思想をもつ。人間が自然を征服して良いとは考えずに、したがって自然を客体と見なさないで、自然と一体であると考え、さらに自然と共存、調和をはかろうとした日本人の自然との接し方は、一体化した「こと」的態度であることに特徴がある。それがさらに禅、わび、さび、生け花といった独特の文化を発達させたのである。

ここで、脳の機能と合わせて考えてみよう。日本人が、自然や自然の中の音に対して敏感であるかを見てみよう。一般に、言葉や計算の処理をするのは左脳、絵画や音楽を処理するのは右脳であることが知られているが、角田忠信氏によると小川のせせらぎや虫の音を聴いたときに日本人と西欧人の反応が異なるそうである。西欧人が右脳でせせらぎや虫の音を処理し、雑音としてとらえるのにくらべ、日本人は左脳（言語脳）で処理するので風流だと感じることができるというのである。このことから日本人は、自然の音を敏感に察知することがわかる。それゆえ、自然の変化に対しても柔軟に対応し調和していくことが出来たといえるだろう。これは言霊、禅、俳句、生け花といった日本独特の「もの」に即して「こと」を感じるといった背景が、ひとつの文化として存在しているように思われる。

以上のことから、西欧的「もの」の見方は理性と自然の対立であり、東洋の「こと」的見方はこころと「もの」の融合といえよう。虫の音

の処理の仕方の例からもわかるように日本人は西欧人があまり感じることのない自然の変化を感じる才能に恵まれている。そのため自然のまえにおかれたときの人間の無力さ、はかなさをよく知ってもいたし、自然の偉大さ、恐ろしさも、良くわきまえていたはずだった。物事は常に変化し移ろい去ってとどまることはない。いわば、この「こと」的世界観が日本人の文化を支えてきたといえよう。

だが残念ながら、「もの」に即して「こと」を感じるといった良さ（こと的世界観）が失われつつある現代である。「もの」はただ単に「もの」であって、それから何かを感じることはあまりない。大量生産、大量消費、情報化社会のなかで「こと」でさえも、むりやり「もの」に当てはめようとする。かつて、「こと」の中の変化してゆく不安定さを愛し、尊んでもいた日本人が、今やその不安定さゆえにいらだちを覚え、恐れおののき「こと」をかき消そうと四苦八苦している姿がある。誰もかれもが「もの」的見方に縛られてひとつの道しか見えなくなっている。一生懸命に勉強して良い学校に入ることしか、子供が認められる道がない。良い学校にはいりさえすれば必ず幸福になれると信じて払う犠牲はあまりに大きい。子供の持つみずみずしい感性を殺して子供をひとつの型にはめこむことに何の疑問も感じないのだろうか。確かに「もの」的に固定的に物事をみてゆくことはある面、非常に便利かもしれない。しかし、人間は物でも機械でも無いのだ。何でも型にあてはめて、すべて良し悪しや正しい、間違いだけで判断してしまうとしたら、簡単に割り切ることのできない人間のこころはどこへいってしまうのだろう。人の思いといったものは。

「もの」的見方によって人間は進歩し便利さを手に入れて生活は豊かになったけれど、便利さを追及するあまり無駄だと思われるものを切り捨ててきた。しかし、いったい、この世に無駄なものなんてあるのだろうか。それぞれ、がんばって生きている。何にしたって、どんなことにしたって、すべては一見無駄と思われる事柄によって生き、生かされていたりする。「もの」的に人のこころを、人間を見てゆくことなんてできはしない。「もの」の中に何かを感じるということが、どれだけ人のこころを和ませ、豊かにしてくれるかをもう一度考えなければならないであろう。「こと」的にものをみるというのは日本人が作ってきた独特の文化であり、私たちを支えてきた生活であったのだから。

春合宿における“哲学体験”

甲南大学　文学部　三回生　岡田　ひでよ

何の心の準備も無いまま、「哲学」の谷口ゼミナールに参加させていただいて一年が過ぎました。正直なところ、やっと一年経ったんだな、といった気持ちです。ゼミのテキスト『身体の哲学』は、私にはちんぷんかんぷんで、所々具体的な話しが出てきて初めて、今はこういう感じの話しなんだ、とわかる程度でした。

しかし、週に一度修業のような苦痛な時を過ごしているうちに、わずかですが、ある一つの考えが浮かんできました。それは、「哲学」をそんなに難しく考えなくてもよいのではないか、というものです。

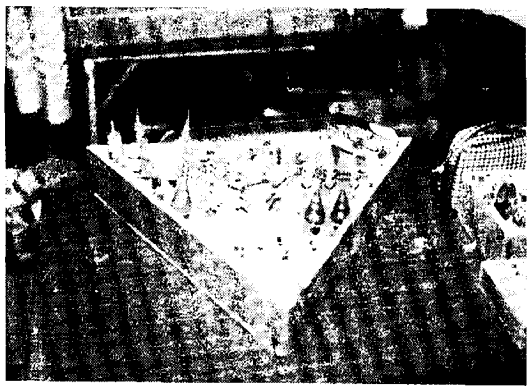
私たちは、哲学の書物というと何かわからない言葉で難しいことが書いてあるものとしたり、さらに哲学というものは、何でもなく言えることをわざと難しく言うことだ、と思っている一方で、哲学というものが私たちに身近なものであるという感じも含んでいます。しかし、私たちに身近なものでありながら、私たちにわからないものになっているという不満が哲学を遠ざける大きな原因の一つとなっているのでしょう。

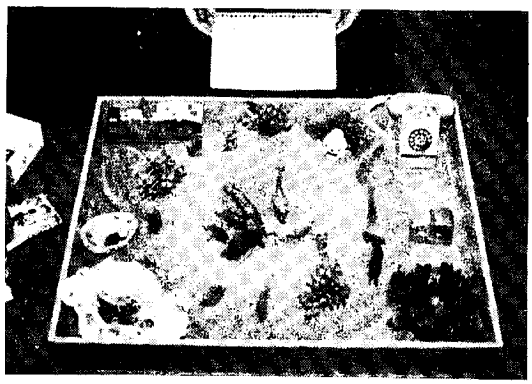
頭から「哲学」は苦手だ、と思っていた私ですが、所々わかるところをつないでいくうちに哲学的にものを考えるということは、もっと日常生活と結びついていることであって、その場というものは至るところにあるんだ、と思えてきました。

特に春合宿の参考文献のうちの一つである『医学の哲学』の中で、「哲学は抽象的な論議であり、何の役にも立たないので不要だ、という人があるが、そうではなく、弓につがえられた矢は一度うしろに引かれたうえで、目的に向かって飛んで行くように、前進するためには一度ひきさがることが必要であり、哲学とは現象あるいは存在の全体を反省的にとらえるものである。」と書いてあります。そうすると、春合宿で行った、箱庭や、脳死のビデオを見てからの意見交換も、自分自身を見つめ、ふり返ることによって、よりよい自分を作り上げていこうとするもので、哲学的にものを考えることになると思います。

私たちはさまざまな経験をしてすぐに、「これが真実なんだ」と思ってしまいますが、経験を積むことによって、今までの経験が、大きなことの一つの断片だったことに気付きます。そして、経験を全体的に論じるとき、私達は哲学しているといえるのです。

哲学はけっして容易なものではありませんが、哲学することは、日常生活に結びついたものである、これだけのことに気付くのに一年もかかった自分にあきれてしまいますが、固定観念や偏見がどれだけ、心の視野を狭めているか気づいて、恐ろしくなりました。





II

第十七回ゼミナール合宿（夏季）

第十七回ゼミナール研修旅行のお知らせ

梅雨晴れの空の青さが目にしみるようですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。今年の夏もまた、谷口研究室ではゼミナール旅行を下記の通り計画しております。従来の、奇形ザル問題、自然・有機農法から更に考察を進めるために、今回は、舞台表現を通して水俣病の真の姿を訴えてこられた砂田 明氏を熊本県水俣市にお訪ねし、一人芝居の背景として『乙女塚』を見学させて頂き、砂田氏に講演をお願いし、討論会などを行う予定です。奮ってご参加ください。

甲南大学　文学部　谷口研究室
昭和63年6月20日

～～～～～～記～～～～～～

日時予定：集合　8月16日（火）JR新大阪中央改札口 AM. 8:30
解散　8月19日（金）JR新大阪中央改札口 PM. 8:00
JR新大阪駅 ☎(06)304－2191

携帯品：参加残金、着替、運動靴、常備薬、学生証、筆記用具、洗面具、保険証コピー、懐中電燈、虫よけ、その他
◎現地は夜に冷えるかもしれませんので、各自その準備もしておいて下さい。

研修先：熊本県水俣市袋 乙女塚、演劇家 砂田 明氏

参考文献：砂田 明著「海よ母よ子どもらよ」（樹心社）
石牟礼道子著「苦海浄土－わが水俣病－」（講談社文庫）
同上「天の魚－続苦海浄土－」（講談社文庫）
庄司 光・宮本憲一著「日本の公害」（岩波新書）

スケジュール：8月16日（火）卒論中間発表及び討論会
8月17日（水）砂田 明氏・乙女塚訪問
講演「海よ母よ子供らよ」
8月18日（木）乙女塚から阿蘇山へ
8月19日（金）リクリエーション（阿蘇山にて）

宿泊地：16日（火）熊本県水俣市国民宿舎水天荘
☎(09666)－3－4191
17日（水）熊本県水俣市袋3792　乙女塚みんなの家
☎(09666)－3－0593

18日（木）熊本県阿蘇郡南阿蘇国民休暇村
☎(09676)－2－2111

申し込み方法：費用は53,000円です。うち30,000円を7月20日（水）までに、下記にお申し込み下さい。

送　り　先：〒563　池田市荘園1－10－21
西村由美 まで

問い合わせ：ゼミ旅行幹事
西村 由美　☎（0727）－61－2169
辻　啓之　☎（075)－931－3806
谷口 文章先生　☎（07712）－3－9464

研修レポート

苦悩と救い

大阪大学大学院　医学研究科　修士一回生　小谷　英子

昨年の夏、田上義春氏にお会いする機会を得た。氏は、激症水俣病に見舞われ、奇跡的に一命を取り止めた唯一の患者である。

水俣病の歴史や現状に触れると、政治・経済・法など社会の様々な問題が、縮図のように水俣に浮き彫りになっている。これらの問題は突き詰めるほど、一方で私たち自身の罪の深さを見せつける。知らず知らずに、また知ろうとしないことで、私たちはいつの間にか悲劇に加担していたことに気づく。

社会・文化は人間によって造られ、人間は時代精神という風土の中に暮らしている。個と環境は相互に作用し、明確に区別できないほど滲透している。マクロ的な視点からすると、私たちが批判の対象とする事象の源は、個々人の内に潜んでいるのである。

氏は自給農園を案内しながら、発病当初からの体験を語ってくれた。ある日突然、水俣病に襲われ、漁師の生業を失い、伝染病だと近隣の人々に避けられ、食物さえ手に入りにくく、家族も次々に倒れ、貧困のどん底の日々を送ったこと、後遺症に悩まされ日常生活もままならないながら農業を始めたこと……。

病いという苦しみは、身体的側面以上に心理的精神的側面をもつ。これらに対し、社会的文化的背景に沿って様々な癒しのアプローチがなされる。しかし、求めればいつも期待したものが得られるとは限らない。癒されえない絶望的な苦しみを担う＜homo patiens＞としての人間は、この運命にどう対処するのだろうか。

氏の語り口は内容の悲惨さとは裏腹に、とつとつと続いていた。理性的な働きはとっくに止まって、ただぼんやりと私は感じているしかなかった。その時の状況は十全に表現できないが、いつしか胸の中の重い塊は溶け、〈美〉としか言い表せない光景に感性は揺振られていた。

氏は水俣病を通じて、この世の地獄を体験し、人間の中に棲む悪魔を－おそらくは自身も含めて－みたにちがいない。人間の恐しさ・汚さ・愚かさを体の芯まで味わい、怒り・憎しみ・悲しみに眠れない夜を幾日も過ごしたであろう。けれど、氏との出会いで感じられた〈美〉の世界は、いわゆる美－醜の対立を越え、あらゆる対立概念を包括していた。それは、すべての存在が許されているという実感であった。

けれども堕ちるひとのことや
又溺れながらその苦い鹹水を
一心に呑みほさうとするひとたちの
はなしを聞いても今のあなたには
たゞある愚かな人たちのあはれなはなし
或は少しめづらしいことにだけ聞くでせう。

けれどもたゞさう考えたのと
ほんたうにその水を噛むときとは
まるっきりまるっきりちがひます。
それは全う熱いくらゐまで冷たく
味のないくらゐまで苦く
青黒さがすきとほるまでかなしいのです。
（宮沢賢治「堅い瓔珞はまっすぐ下に垂れます」より）

〈美〉はこうした苦悩を透過して初めて成立する。救いは苦悩の果てに訪れる。個を呪縛する人為的現象を批判すると同時に、個自らの内にも批判の刃を向け血を流す苦悩なくしては、新たな道はみえてこないのではないだろうか。

（1989年3月1日発行「医療人類学」より転載）

いのちのつらなり

甲南大学　文学部　四回生　阪田　和子

「百間港は、ながく馬刀潟と呼ばれてきた貝の宝庫で、江戸の初期から美味をもってきこえた『水俣塩』の発祥地となった入江でございますが、それからほぼ三百年あとに、あの原爆病と共にこの世に在ってはならぬ病い、同じ郷党のひとりとして、名を口にしてさえ胸いたむ水俣病の、曝心地となった場所なのでございます。」（註①）

「あの原爆病と共にこの世に在ってはならぬ病い」「水俣病の曝心地」 ― ショッキングな言葉だった。今回のゼミナール研修旅行に参加する前の、水俣病に関してほとんど何も知らなかった私にとって、実感は伴わないものの「そういうものなのか」と漠然と驚かされた言葉だった。

谷口先生の講義中にＮＨＫの番組録画「海よ母よ子どもらよ ― わが水俣病 ― 」を見た時にも、砂田 明氏の口から出てくる一言一言、そしてその魂の力強さに圧倒されながらも、私は「何がそうさせるのだろうか。」という思いを取り去ることができなかった。

ゼミナール研修旅行に参加するにあたって、石牟礼 道子著『苦海浄土』『天の魚』、そして砂田 明著『海よ母よ子どもらよ』などを

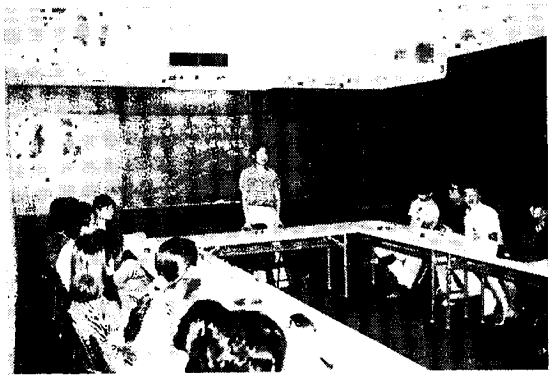
読んで、水俣病の苦しさ、悲しさを知った。また水俣市で、相思社の高倉 史朗氏による講演において、水俣病の歴史と現状について、現場（その最前線）にいる人の立場から話を聞くことができた。そして砂田 明氏の講演を実際に聞いて、ようやく御本人の魂を動かしたもの、その一言一言の力強さのわけを実感することができた。

東京から初めて水俣を訪れた時、小さい頃自分のまわりにあった自然がこの地にあって、とてもなつかしい思いがし、ここに住もうと決心したとおっしゃった砂田氏。水俣病というあまりにも大きな病の「曝心地」となった水俣は、その衝撃の中で自然環境が崩れそうになりながらも、海が砂浜にくりかえし波を打ちよせたように、一刻一刻まさに生き、「いのち」の火をもやし続けてきたのであった。そして、地球上に生きている人類全体に対して警告を発するために水俣病を背負った「身がわり観音」が次々とこの地に降り立った。そう考えるとき、この地球上の、過去から未来へと続く時間においての「いのちのつらなり」の中にいる砂田 明氏が見えると同時に、そのつらなりからはずれ、力尽きて山のようにうずたかく積みかさなっている人々の群れが見えるような気がした。

もし　あんたが　人やったら
起ちなはれ　戦いなはれ
公害戦争や　水俣戦争やでえ
戦争のきらいなわし等のやる戦争や
人間最後の戦争や　正念場や
勝たな　あかん　勝ちぬかな
――子どものために　孫のために　親のために　先祖のために
そうしてこの自分自身のために　一度しかない人生のために

（註②）

「一度しかない人生」を力の限り生きることが「いのちのつらなり」を支え、守ることであり、またそれが、この世にいのちを受けたもの



初日
開会式（水天荘にて）

の使命であると感じた。
この現代社会の中で、素直な心でこのように考え、感じる機会を得ることができて、私はこの出会いに感謝している。
（註）
①石牟礼 道子原作、砂田 明脚色『＜現代夢幻能＞天の魚』より
②砂田 明著『海よ母よ子どもらよ』「起ちなはれ＜Ⅱ＞」より

希望——生きるということを考えて——

甲南大学　法学部　三回生　辻　啓之

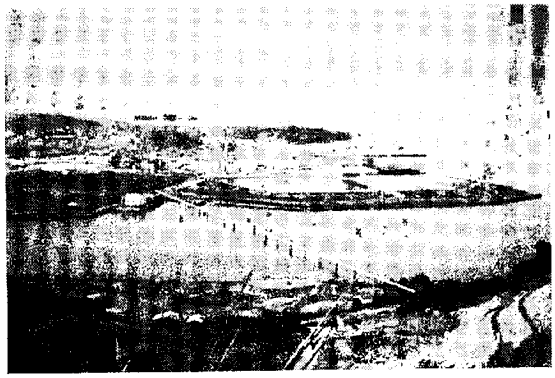
「わし、死ぬのは怖わない。毒で殺されるのんがいやなんや。毒でやられたら、わし自身が毒になっていつまでもこの土に残らんならん……それが、ふーっ、なんとも、や、やり切れん。」
これは砂田 明先生の著書『海よ母よ子どもらよ』に載っている『《大道芸》海の胎』という脚本の中で、除草剤をかけられ枯れていく草が言う台詞です。
昨年、谷口文章先生の一般教養の哲学の講義で「市販の卵は親鶏が食べる餌に防腐剤や添加物が入れてあるから、一夏放っておいても腐らない。」と聞きました。ということは、様々な食物中から防腐剤などを採り込んでいる文明人は死んでも腐りにくく、日持ちが良いかもしれない。そして、アフリカのライオンなどに日本人の肉を毎日食べさせたら、なったこともない病気で死んでしまうかもしれない。つまり、もうすでに我々はある意味で“毒”と化しているのではないだろうか。この考えは、先の草の言葉と相まって私の心に重くのしかかってきました。
ここに言う“毒”とは「生き物が生きていくために在るべきでない

水俣病センター相思社
高倉史朗氏講演
「水俣病の歴史と現状」

もの。生態系を乱すもの。」と解しています。具体的に挙げてみると、先に述べた除草剤・防腐剤・添加物をはじめとする薬物の他、排煙や廃液など、また、それらを生態系内で循環させるものであり、水俣病の原因となった有機水銀や、それらを採り込んでしまった魚などが当てはまります。水俣病は一般に知られる急性疾患の場合、突然、全身痙攣を起こし、ほとんど為す術も無く死に至るのですが、他に慢性疾患もあり、現地を訪れてみて今も多くの人々が様々な症状を抱えて生きておられることを知りました。こういった慢性疾患は広い意味では日本人すべてが持っているものと考えられます。食物中の薬物、空気中の排気ガスや排煙、川や海に流されている廃液など、我々は絶えず比較的濃度の薄い“毒”を様々な形で採り入れ、その多くを体内に蓄積しています。このような状況がこれからも続いていくと、現在、影に隠れている慢性疾患もどんどん悪化するとともに表面化し、体は弱り、奇病が増え、胎児性異常つまり障害児や流産が多くなってくる、というようなことは容易に想像できます。

何とかしなければ、そして何かをしなければ。

我々は便利だから快適だからと、インスタント食品を食べ、電気製品を使い、車に乗っています。そんな今日の日本人にとって当り前の行動が公害を進め、自然を破壊し、生態系を乱しているのです。企業はそれを助長するように、膨大な量の様々な商品を市場に流しています。その製造過程に於いても多くの“毒”を産みだし、排出しながら。また我々の日々の食生活は、生産高を上げ、コストを下げ、流通に乗せるために農薬をふんだんに使った野菜や、全く得体の知れない餌で育てられた家畜の肉などによって支えられているのです。仕事をしてお金さえ稼げば、食べ物はいくらでも売ってるし、車を買って、保険に入って、子供を塾に通わせて、家のローンを払って……。誰もが、して良いことと、してはいけないことが分からなくなっているというのが現状だと思います。



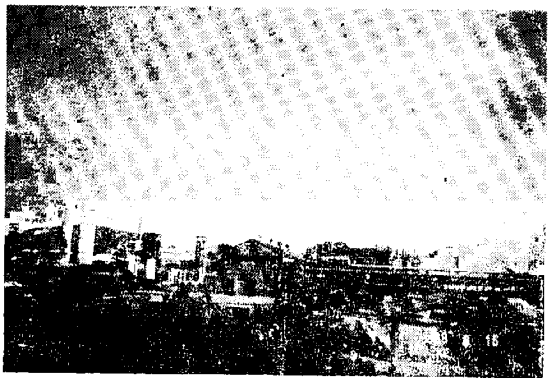
二日目
水俣市内見学、工場群と八幡プール（汚泥処理場）を丘の上から展望

実際、食べ物を良くするためにと自分で畑作を行い、原子力発電が危険だからと電気を使わず、排気ガスが有害だからと車に乗らないというのは非常に難しく、なかなか出来ないことだと思います。それが企業レベルや国レベルで実現されるかどうかと考えると、ちょっと気が遠くなります。

「でも、諦めるわけにはいかない。」砂田先生にお会いして、強くそう感じました。様々な問題を訴えるお芝居をしながら全国を回られる一方、御自宅の畑では無農薬の野菜を作っておられ、また我々のような訪問者をあたたかく迎え入れて、色々な事をお教えくださる。そういった先生の生き方とともに「競争でなく共生していかなければ、本当に惨めだ。」という御言葉には大変心を動かされました。

「自然と共生していくためにはどうすれば良いのだろうか。」「無償で多くのものを与え続けてくれる自然に対して、人間はどのように関われば良いのだろうか。」今、この問いに明確な答を与えることは出来ません。しかしまず第一に、すべて生きるものは食物連鎖の鎖の一部であるべきだと思います。死んで他の生物の糧になれないのは、あまりに悲しいことではないでしょうか。やはり人間もコンクリートで固められたちっぽけな生活系を越えて、大自然の生態系に身を委ねていかねばならない。そして、そのためには目先の事象に囚われることなく、あらゆる事物と共に生きていかなければばならないのだと痛感しています。

多くの方々に多くの事を教えて頂いた合宿でしたが、暗く重く厳しい現実の中で輝く命の素晴らしさに、生きていることに対する喜びと希望を感じることが出来ました。御世話になった方々に心より感謝すると共に、今後も諦めずに問題意識をもって取り組んでいかなければならないと思っています。あの草の訴えが、再び喜びの歌となる日を目指して。



チッソ水俣工場

夏、水俣での日々

甲南大学　文学部　三回生　榎本　修一

水俣の駅に列車が到着する。

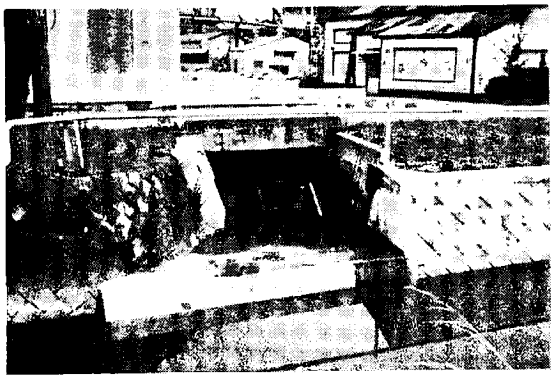
駅から一歩足を踏み出すと、あたたかい気候と、水俣の街並が広がった。その穏やかな風景と対照的な水俣病。時と共に深く沈んでゆく病。それは水俣の存在を心に暗く滅ませる原因となった。

水俣病を孕んだ土地。美しい土地。目に見えぬ不安が心の奥底に湧き起こり、そしてそれは次第に亢まった。

第一日目。高倉史朗氏の講演会が行われた。拝聴している中で、人が欲望の為に命を奪う、それが水俣病だと感じた。私はまた、この利己的行為が水俣市の水俣病だけではなく、世界各国に存在すると感じた。この世界中に散在しているものが、人間だれしも持っている悪に通じるなら…。チッソの人達が特別な人間であったのではない。彼らは自分たちの幸せを望む普通の人間なのだ。つまり誰でもチッソ工場をつくり、有機水銀を垂れ流すことはできるのだ。こう考えると、掴みどころのない不安はさらに広がってゆく。

第二日目、水俣の街を見学した。街は幸福そうな一地方都市の顔を平然と装い、その歴史は影を秘めていた。だがその端々に、抑えきれない歴史の影は漂っていた。ダイヤモンドの波頭を持つ水俣の海。その中に住む人間を恐れない魚たち。静かな海岸線や緑の島々。しかし、その美しさの中に魂の悲痛な叫びを聴いた。つまり国の高度成長期に傷つけられたものの叫びである。

水俣の人々はその歴史の影と対面して生きている。しかしその影も年月が経つとともに、諦念にも似た表層的な平和によって濃淡を変えてゆく。その姿が水俣に感じられた。一部の抗議や、運動は確かに残っているだろう。しかしその闘いが風化していないと誰が言えるのだ。水俣病が公害病のひとつとして小学校の教科書の上に埋もれ、さ



水銀含有汚水が流された工場の排水口

らにその教科書の内容も抹殺されてゆく。そんな時代だ。

その晩、砂田 明先生にお会いした。私の中に渦巻く不安は、心の奥底を離れずにいた。

砂田先生はその晩、私たちに「草の学校」の一場面を演じてくださった。それは自然の生態系についての話であり、その循環を切ってしまう有機水銀（水俣病）についての予告編のような役割を果たしていると思われた。

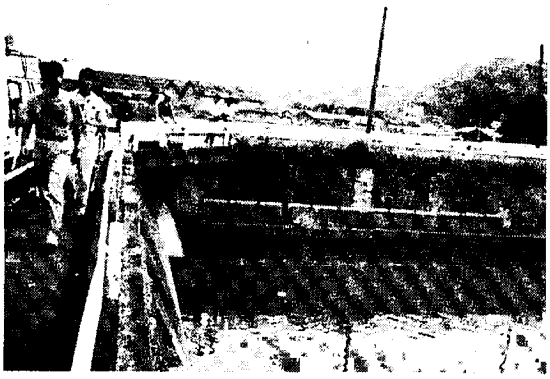
自然の生態系はそれが正常に循環する時、自然は生と死の素晴らしいドラマを創る。人はいにしえの昔、生と死のドラマの中にいた。人は生まれることの荘厳さ、死ぬことの神々しさを知っていた。人が暮らすという事は、このドラマを創ることに相異なかった。

だがいつからか、人間の知恵は人の暮らしと、生と死のドラマを引き離しにかかった。また、人間の知恵は生きるための安全をより高めた。そのことが、本当の意味で生と死を失くしてしまったのではないか、と思うのだ。つまり何が生きていることで何が死んでいることなのかわからなくなってしまっている。それが「人間のつくった安全」ではないか。

砂田先生が演じている途中に登場する万物の霊長であるとおごる人間。安全と共に毒をも作る人間。そんな人間が自らの生と死のドラマを有機水銀で溶かしたのだと感じた。自然と対立してしまった人間。その人間が作り出した有機水銀という名の悪魔。砂田先生の演ずる姿から、すでに忘れさられて久しい生と死のドラマが生じる。それはあらがうだけでない静かな闘いを表現しているようだった。

砂田先生の演ずる中で、自然の代弁者宮沢賢治の詩が詠まれる。

（雨ニモマケズ）
雨ニモマケズ
風ニモマケズ



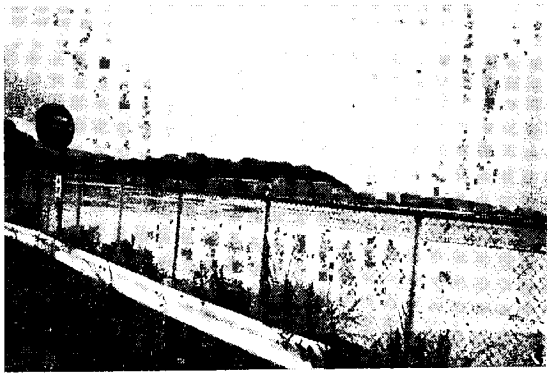
排水の水俣湾への出口
百間港

雪ニモ夏ノアツサニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
欲ハナク
決シテ瞋ラズ
イツモシズカニワラッテイル
———中略———
ヒデリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ

砂田先生はこの中でデクノボーというところを強調されたように思う。宮沢賢治にもこのデクノボーという言葉には特別の想いがあるようだ。

病気を患い父に負担を掛け、さらに最愛の妹トシ子を病気で失った。そんな賢治にとって、丈夫な体を持つということは大きな望みであった。そのような経験と、賢治の宗教観—自己犠牲的な隣人愛—がデクノボーという言葉になって表れた。

それにまた、この詩を一行一行詠んでゆくと、デクノボーと呼ばれる人間はいにしえの人、生と死のドラマの中にいた人間に思える。つまり、この詩の一行一行に生きることを喜び、死ぬことを悲しんだ作者の魂があるのだ。人は昔、自然の中に死を見た。雨は大地を洗い流し、風は大木を倒した。雪はすべてを凍らし、日照りは大地にひびを入れた。その自然の猛威はまさに死を示した。しかし、その死は次に



水俣湾内埋め立て地
（約60ha）

生への姿に変わる。

洗い流された大地から新しい芽がふき、倒された大木の影に小さな木が育つ。雪は溶け、日照りの大地にいつしか雨は降る。その時、「イツモシズカニワラッテイル」それがデクノボーではないか。そんな自然を愛している人こそ賢治、あるいは砂田先生だと思うのだ。

砂田先生のデクノボーの声はさらに（丈夫な体と魂が、有機水銀によって溶かされ、二度と再生できないのだ）という苦しみを含んだ喘ぎに聞こえた。

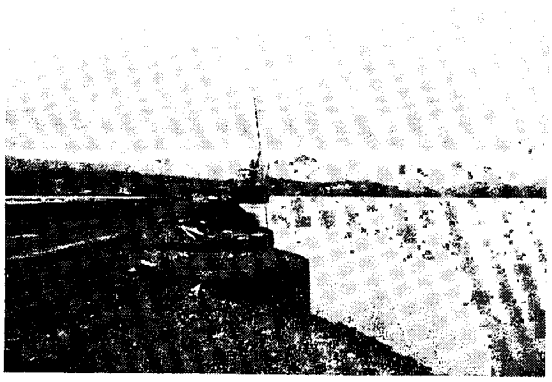
砂田先生の静かな、しかし消えいることのない闘いが、心の中の捕らえられない不安を具体化し、そしてさらに生と死のドラマを再び思い出すことを教えていただいた思いがした。

自然と人間——ゼミ合宿に参加して——

甲南大学　文学部　三回生　山本　たまみ

水俣に行く、ということは、私にとって正直に言うとあまり気乗りせず、半ば重苦しい感情がなかったとは言えない。実際に、いざ水俣駅に降り立つと、目の前に大きくチッソの工場がそびえ立っていて、ふと、何年も前に社会科の教科書に載っていた水俣の風景や水俣病患者の人たちの写真が思い出され、現実の重さに、この時にもうすでに参ってしまった。

しかしその夜、相思社の高倉さんの話を聞いて、全て一変した。私自身水俣病について全くといっていい程関心がなかったし、あまりにも知らなさすぎた。私は、教科書の写真を見て、そこから受け取ったイメージだけが水俣病のすべてだ、と思い込んでいたが、水俣病が発生したあらましや、人々の苦悩と闘い、今もなお続くこうした現状を



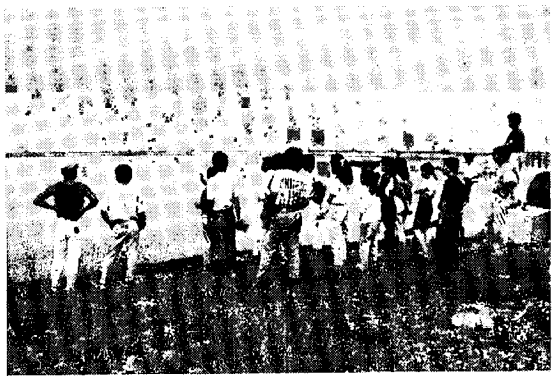
埋め立て地の先端

生の声で聞き、自分の曖昧な中身のない認識を大いに反省した。もし、あの時高倉さんのお話しを聞くことができなかったなら、その後の行程も重苦しいだけのものだったかもしれない。

次の日、水俣病の患者さんにお会いし、彼らのその圧倒的な明るさに驚かざるを得なかった。想像していた人間像とはあまりにも掛け離れており、精神的にも大変伸び伸びしているといった印象を受けた。確かに五体満足な我々を正常という言葉で捉えるなら、身体面では彼らは障害をもっているのかもしれないが、それはあまりにも浅はかなことで、足もとをみつめれば、彼らは我々と何一つ変わらない。それどころか、ずっと豊かな感性を持ち、ずっと自然体である。彼らのその豊かさや明るさは、自然の中で生きることによって得られたものに他ならないと思えてくる。その後に砂田 明先生を訪れた時も、自然の中で人間はいかにあるべきなのか、自然とは一体何なのかを改めて考え直すことになった。

自然の真っ只中で、自然と対峙することはそう容易なことではない。自然の中では人間はあまりにも非力すぎる。また自然というものに対して的外れな幻想や憧景を抱き、真っ裸のまま飛びこんでしまうのはとても危険なことだ。相手は美しいから恐ろしく、優しいから残酷である。最近では自然が何かと言えば話題となり自然に対して以前よりも深い認識をもつようになっている。そして自然へのロマンティックな単純な思い込みがもはや不可能であることや自然との直接的な結合の中に生きるのがひどく危険で死をもたらしかねないことも解ってきている。ただ一つ、私が大事だと思うことはどうやったら相手のものすごさも充分にわかった上で、自然と共存生活を過ごせるのかということである。

大きな自然の中では現代社会に生きる「我々の時間」の概念は存在しないし、死ぬことさえ生の一部としてポジティブな意味を持ちうる。流れゆく大きな時の中で同時に動物や植物と共に自分達が生きている



埋め立て地から水俣湾を望んで（24ppm以下の水銀は処理されず、放置されている）

のだという認識をもち、そこから生まれる生命力を持つことが出来れば素晴らしいと思う。水俣で出会った水俣病の患者さんや砂田先生御夫妻がそういった生命力を持ち、自然の一部としてごく当り前に自然と向きあっていることに重要な何かを掴みとることができた。自分に足りないものをないものねだりすることよりも、今ある自分を見つめるということである。今ある自分は何ものにも替え難い事実そのもので、その実存的な自己を無理矢理変えようとしたり、劣等感を持って他人を羨むことは疲れてしまう。そして自分が見えなくなり、余分なものばかり身についていく。今ある自分をきちんと、何の思い込みなしに絶対的に見つめ直すことができれば、そこから自分自身の歩みが始まる。水俣病の患者さんの明るさと自信すら感じられる表情からは何の感傷も思い込みも見受けられなかった。

水俣病は現在も、水俣病訴訟やチッソとの交渉といった人々の闘いと努力が繰り広げられ、終結してはいない。チッソの無責任な廃液のたれ流しによって、様々なものが壊された。魚を食べた人々の健康だけでなく、自然の食物連鎖や、多くの動物、そして健全な精神も歪んでしまった。その罪は重すぎる。

チッソは現代社会に生きる我々が生みだしたものであり、砂田先生もおっしゃっている通り、現代社会に生きる我々が水俣病の犯人でもあるのだ。このことがはっきりと解り、私のもう一つの目が開いた。あまりにも問題意識が無さ過ぎた。水俣病の問題は水俣病患者やチッソや水俣市民だけの問題として捉えていた自分の薄っぺらな問題意識が、もう一つの目の中に飛びこんできた。水俣病の問題は日本人の、人間としての問題である。毎日のように起こっている様々な問題を通り過ごしていては、人間としての厚みや心のひだを刻むことは決して出来ない。そしてそんな自分に気付いた時に水俣でお会い出来た砂田先生をはじめ様々な人達の心の豊かさに改めて感動させられた。彼らのその豊かさは他ならぬ自然の中で生きることによって得られたもの

汚染された漁場、
恋路島

だと私は確信してやまない。そして彼らをとり囲む緑の自然は、彼らが自然の一部であり、彼ら自身の鏡として自然が存在していることを大きな時間の流れの中で囁いていたのだと思えてならない。

自然というものをスタティックな生きものとして捉えることはどうも間違いで、溢れる生命力や動物以上のはるかな動的な力で満ちている。人間は決して自然を飼い慣らすことは出来ないし、必然的に自然の為すがままになっていくことだろう。決して優位に立つのではなく、緑を見つめ、緑に見つめられ、対話し、互いの生命を確かめ合うことが自然の中で生きていく「共生関係」のありかただと水俣でお会いした人々から学びとれたと思う。

魅せられた水俣——内なる自然を取り戻すために——

甲南大学　文学部　三回生　坂田　佳子

今回のゼミ合宿は、水俣病の発生した地域である水俣市へ出向きました。以前の合宿では、淡路島や小豆島で観光のために餌付けされたサルの中に多くみられる奇形ザルの観察、考察が行われてきた。その結果、人間の与えた餌によってサル社会の仕組みにひずみが生じていること、餌の中に含まれる農薬などによって奇形のサルが多数現れていることなどを知ったのです。そして、そのような問題はそのまま人間に置き換えて考えることができるのではないかということで、より深刻で身近な問題として、水俣病が取り上げられたのでした。

ゼミ合宿の前に、ビデオで砂田先生の一人芝居を見たり、砂田先生の著作を読んだりしていたので、多少なりとも事の重大性は把握していたつもりですが、一朝一夕の詰め込み知識だけでは、どんな言葉を並べたところで何にもならないような、かえって自分の甘さを思い知

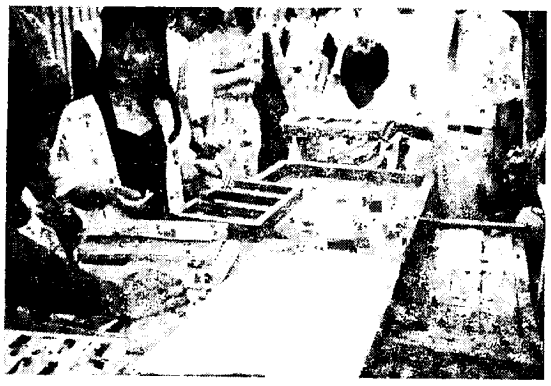
浮浪雲工房、紙すきをする田中ミキエさん

らされるような不安がありました。また、砂田先生にお目にかかる事で、自分の生き方の甘さを見透かされ、弱い自分自身を見せつけられて落ち込むのではないか、という不安を感じていました。

そんな不安を抱えながら参加した訳ですが、JR水俣駅におりたった時、まず最初に目についたのは、チッソ関係の看板でした。「まだこの会社が水俣市の中心に存在しているのか」というのが、よく事情を把握していない私にとっては素朴な疑問でした。そこからバスに乗り込み、山沿いの田舎道を揺られていくにつれて、海岸の美しさが際立って、チッソ工場と妙なコントラストをなしていました。そして、相思社を見学したり、砂田御夫妻にお世話になったり、砂田先生の一人芝居を拝見させていただいたりする中で、先生を初め、水俣病問題に苦闘している人々の熱意や思い入れを感じました。また、優しさや人間味も感じながら、自分の抱いていた不安感も、徐々になくなっていくようでした。

現在、劇症性の水俣病の発症が消滅し、水俣病自体も問題視されにくくなってきました。しかし、不妊、流産、死産、胎児性水俣病、精神薄弱といったように、水俣病の症状がどんどん潜在化していっているのを知るにつけ、確かに水俣の、水俣病という病気ではあるけれども、水俣だけの病気ではない、現在の日本、或は世界の姿を投影しているように思えてきます。水俣のメチル水銀を、工場の汚水、家庭の汚水、食品添加物、農薬と置き換えて考えると一層はっきりするでしょう。

自然の生態系を破壊し、海を汚すことによって、母胎の海を徐々に徐々に、しかも慢性的に汚していく。母胎を美しくするべく内なる海の毒物を胎児が一掃していく。自らの小さな身体を犠牲にしてくれた障害をもった赤ちゃん達は、私達社会に警鐘を鳴らしてくれているように思います。我々が自然のサイクルを壊して、自分達の生活を無意味に便利にしていった傲慢さに、みんなが早く気づいていかないと、



紙すきを体験する
ゼミ生

可愛い可哀相な犠牲者は後を絶たないでしょう。こんな社会の流れを作って、自らをも滅ぼしかねない人間に哀れを感じます。

そして私自身も、その流れに、自分の主張を持てないままに流されている一人です。相思社の方々や砂田御夫妻が、大変な、本当に大変な数の警鐘を知って、社会に対して疑問を感じ、自らの手で主張し続けていらっしゃることは大変な作業でしょう。葛藤、苛立ち、焦燥感、絶望をお感じになりながら、しかも、その努力のわりには報われないことが多いと思います。しかし、だからこそかえって得る物も多いと推測されます。社会の大きな流れに逆らって、自分達のポリシーを持ち続けて生き生きと生きておられる砂田御夫妻、相思社の方々を素晴らしいと思います。

私には、砂田先生や相思社の方達を応援するぐらいの事しかまだ出来ないし、集団に流されたり、自分の意志をはっきり持てないでジレンマに苦しんだり、そんなちっぽけな事の繰り返しだけれど、何か自分にできる事を見付けてやっていけたらと思います。砂田 明先生や高倉さんが魅せられたように、私も水俣の美しい海を心に焼きつけていたいです。

文明への基礎的一考察

甲南大学　理学部　三回生　深谷　昌生

「文明とはいったい何なのであろうか？」あまりにありふれた、陳腐とさえ思えるこの疑問を再び問い返す必要がある。辞典（TBSブリタニカ）に意味を求めると、文化（civilization and culture）の具象的な特殊形態例として呈示されている。そして文化の提言を要約すれば「本能の様に先天的で遺伝により子孫に伝えられるものと異なり、

人類の“宝子”上村智子さんを祀る乙女塚

何らかの模倣や学習により次世代に受けつがれていくもの」である。
ここに於いて、文化を精神的活動面を主とした肯定的なものとしてみるならば、文明には文化の枠を無視して暴走している部分が存在しているのではないだろうか。そしてその暴走部分が生じせしめるものこそ現代の世界における様々な歪みであると思える。水俣病の原因である有機水銀や、今大問題のフロンガス、諸々の産業廃棄物等々。もっとも、これらは極端な例であって、誰しもが何らかの文明に関与している限り、すべての文明になんらかの弊害がともなう危険性がある。例えば、車や単車に乗り、ドライブやツーリングしているだけで満足出来る者もおれば、速く走る事に全てを賭けているプロもいる。その反面、人に必要以上の迷惑を掛けてでも公道を暴走する者なども存在している。そしてそれら全てでもって車（単車）文明と言うのである。
そのような状況からみるに、文明の暴走を抑えるためには個々の人間性から社会の文化性を高度化し、その高度化された文化性により文明をも洗練していく事が必要であろう。そこで大切なのが、如何なる価値観を支点として文化を築き治すべきかであろう。私達の車に対する価値観でさえ前述の様に様々であり、同様にこの世に存在する全てのものに対しても様々な価値観が存在する。グローバルな視点では民族的な価値観の相異も加わってくる。そのような状況に於いて個々人が自分本位の文化的立場の意志を主張するのは無理がある。ではどうするべきか、私は人間が人間である以前の大前提、つまり、自然界における一生物という視点に戻る以外は無いと考える。そうすれば生物としての人間が進んで行くべき方向も明確になる。そして、生物の究極の目的は、「後顧の憂いを残す事なく、すみやかに子孫に次世代を受け継がせて行く」ことにつきるといえよう。その視点からたどる事で人間の、そして社会、人類の“分”は己づと決まる筈であり、その“分”を見極める為にこそ諸々の科学は存在するべきであると思われ

“海の母子像”を説明する砂田 明氏

る。

そうなのだ、文明をも含むすべての文化的活動は人間を包含した全ての存在連環の、そして種の存続という大目的を念頭に置いた上で行われねばならず、一部の者の為の暴挙によりその目的を乱してしまっては意味が無い。その厳しい範囲内で人間はその心身を自由にし、解放して行かねばならない。科学を中心とする物質文明などはその為の道具であり、それ自体が生きて行く目的では決して無い。科学などの文明による所産である文化は、前述の観点を軸とした哲学の下に全てが洗練される必要があるだろう。

culture はよく知られている様に耕作でもある。人間は文化で他を耕作する前に先ず己を耕作せねばならない。詩人であり、且つ評論家のM．アーノルドはその著『教養と無秩序』において文化のあるべき姿を「今まで世界中で考えられ、言われてきた最高の事を学び、自己の完成を追求すること、即ち全的な人間性の発達こそが文化である」と定義した。私は真に現実の文化がその様に洗練されて行く事を望んで止まない、それこそが人間の生き続けることの意味にちがいないであろうから。

公害問題対策と取り上げ方

甲南大学　文学部　四回生　田中　素子

春の合宿に引き続き、谷口ゼミナールの合宿に参加させて頂いたが、私にとっては初めてのことばかりだった。相思社の高倉さんにお会いし、実際の水俣問題に現地で接することができたこと、乙女塚を訪れて、一人芝居をなさっている砂田先生にお会いし、直接お話しが聞け

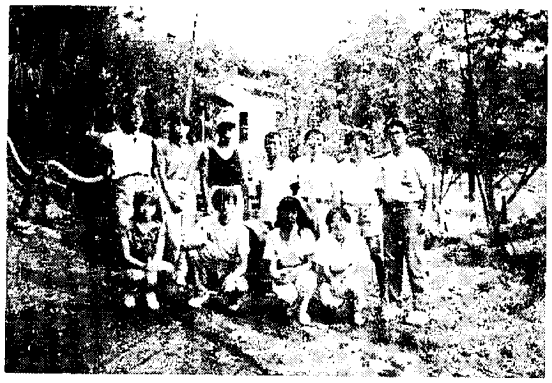
劇症性水俣病を克服された田上義春氏

たこと、また、九州に足を踏み入れたこと自体が初めてのことで、数え上げれば切りがないほど新しい体験の連続であった。それゆえに合宿から帰った後も、省みて自分が何を体験したかを改めて確認し、自分の心の中にそれらを消化し納めるのに随分時間がかかった。

水俣での最初の大きな経験は、高倉さんに説明を受けながら水俣市を案内して頂いたことだったが、それはその前日に水俣病の歴史と現状に関してのお話を聞かせて頂いたことと併せて、大変有意義な体験だったと思う。私は高倉さんの熱の入った話しぶりに何故かしら引き込まれた。自分達は水俣病という人間にとって重大な問題と闘っているのだという奢りのようなものは全く感じさせず、水俣病の現状をしっかりと把握し、淡々と（実際の心の内は、環境破壊・汚染に対する熱い怒りとそれに立ち向かわなければならないという確固たる信念をお持ちであると思うが）その問題に取り組んでいらっしゃる姿は、私の心に感動を呼び起こした。私は今まで、水俣病その他の公害病に関して教科書程度の認識しか持っておらず、環境破壊・汚染による大きな被害を実際に自分やその身の回りに被った経験もなかった。それゆえ日々少しずつそれらに脅かされていると知りながらも、目に見える生活の中でまだ大丈夫などと甘い考えを持ち、意識的に、または無意識のうちに公害問題から目をそらしていたというのが、本当のところであった。

けれども、公害問題に無関心だったことの原因は、自分の生活はまだ大丈夫だと信じたい気持から現実を見なかったことだけではなかった。高校までの社会の授業の中で取り上げられた公害問題は、教師も生徒も知識として教え、教えられるものだった。どちらも悲劇的な体験をしていないから仕方がない。実感のわかない授業はどんなに大切なことであっても印象が薄くなる。しかしだからといって、悲劇的な公害問題を紹介しさえすれば良いのだろうか。

確か高校１年の時の夏休みに（どの教科だったか忘れたが）、カー

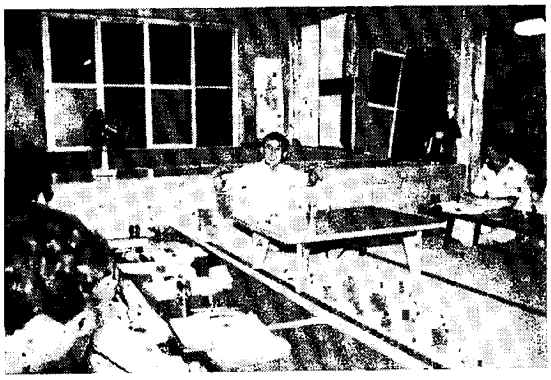


乙女塚農園で田上氏を囲んで

ソン著『沈黙の春』や四手井綱英著『森の生態学』などの本を紹介されて、それらの中から1つ選んで感想文を書いたのを覚えている。その時、私がどんなことを書いたかは思い出せない。たぶんお決まりの上っ面なことを優等生的に書いたのだろう。ひょっとすると「こんな難しいことはわからないから自分の身の回りのことを書きます。」と生意気なことをしたかもしれない。いずれにしても当時の私には本の内容の半分も理解することは難しかったし、それに対してお決まりの感想文で答えるしか手だてはなかったと思う。何よりもそういう決まり切った答えを書くことが無駄に思えた。公害問題・環境問題はこんなに大変なことなんですよと言わんばかりに難しい本を読ませ、それでいいのだという先生の考えにうんざりしていた。こんな実感のわかない難しい本を読んで、わけもわからず公害反対、環境破壊反対、と書くなんてナンセンスだと思った。

だが、被害の大きかった公害病や環境破壊だけが考えなければならない問題だろうか。ヒステリックに公害は恐ろしい、公害反対とただ叫べばいいのだろうか。たとえ恐ろしさを知ることはできても、それを普遍的に捉え、身を持って理解しなれば何にもならないのではないだろうか。私はもっと身近な問題として、自然な形で公害問題を捉えたかった。そしてようやく、今回ゼミ合宿で水俣に来たことで、公害問題に対する考え方や自分なりの関わり方が分かりかけてきたように思う。何もかも受け入れてしまう自然と、その中で暮らす人々—加害者であるチッソ側の立場をも決して非難するばかりでない被害者の人達、そして彼らを応援し、公害対策の運動を誠実に続けている人達—に触れて、私は何故かこれでいいのだなと、ある意味でほっとした。（それは、当事者の方々には無責任に聞こえるかも知れないが、ヒステリックに公害反対運動をおこすというよりも一歩一歩の自覚から正しい方向づけが生じつつある、という意味である。）

水俣病発生から時が立ち、一応の解決がなされたとはいえ、まだま



砂田氏講演
「海よ母よ子どもらよ」

だ被害の爪痕を残す場所で私達の心が一瞬和んだのは、水俣の自然と人々の暖かさと誠実さのためだったに違いない。これ以上この静けさや平和を無くさないためにも、自分達の手で自分達の生命を脅かすという愚かな行為をしないためにも、日々の生活の中で常に自分を省みながら公害というやっかいな問題に目を向けて、一つ一つ取り組み続けていきたいと私は思う。

自然、人間そして文明

甲南大学　文学部　四回生　西田　彩子

いつ頃からだっただろうか、この地球上で人間だけが不自然な「浮いた」存在であるかのように思うようになったのは。

人間という生物は、犬や猫、ミミズやゾウリムシ、あるいは木や草花と同じく自然の一部であるはずだ。生物に限ったことではない。石や土ですら、自然の一部として生物以上の存在感を持っている。なのに人間のみが浮いた存在として、間違った存在として、違和感を感じさせているのはなぜだろうか。コンクリートの建物を造り、プラスティック製品を使い、自動車に乗っているのが違和感の原因なのだろうか。そうだとすると、そういったものを造り出してきた人間の知恵が、諸悪の根源なのだろうか。人間は知恵を持ってはいけなかったのか。

人間はずいぶん昔から自然の中で暴挙をふるってきた。ありとあらゆる生物は人間のために利用され、大自然でさえも人間の支配下に置こうとしてきた。自然の中でなぜ人間のみがこんな暴挙を許されてきたか。人間がいわゆる知恵を持っているからである。その知恵で自分の罪を悟ることができるからである。だからこそ大自然のモラルはこ

『天の魚』の仮面を手にする谷口先生

の罪深い生物を許してきたのだろう。

そのように許してきてくれた自然を、人間が無視し始めたのはいつ頃からだっただろうか。人類学的、歴史的な観点でゆっくりと見守ることのできる文明の発展から、急速な産業・技術の発展いわゆる高度成長期を経て、今や何もかも行きどまりに達しているように思える。確かに現在も新たな技術が次々開発され、将来を考えれば、理想的な文明生活、宇宙への進出などポジティヴなヴィジョンは目に浮かぶ。しかしそれを考えるには、現在我々の抱える問題、文明の発展から生じてきた様々な問題があまりにも多すぎることを、知恵ある隣人と同じく私も気づいている。

環境破壊、多発する事故、増える心の病、意味不明の殺人、薬物を乱用する若者達、現在とは、まさしくSF小説に出てくる退廃的世紀末像そのままの時代に見える。もちろんこれら文明の病気の一つとして、環境破壊とともに公害病を筆頭にあげてもいい。どのように対処すればなくすことができるかわからない意味不明の殺人事件とは違って、公害問題を含む環境破壊問題には具体的な解決策が可能ではある。しかし企業側の事情、利害関係が複雑に入り組んだ産業社会の中では、そう簡単にはいかないのかもしれない。だが、金銭的に豊かな日本の企業の常套手段である公害病の患者、犠牲者の遺族の人々に対する補償金すらも、訴訟をおこして十年も二十年も闘い続けなければ、得られないということは一体どういうことなのか。またそれすら得られない時があるということは一体どういうことなのか。

もちろんネガティヴな面ばかりではない。目をこらせば一条の光は見える。フロンガスは規制された。また十年ぶりに東京を訪れた外国人は、十年前より空気が綺麗になったと言う。我が家の近くの濁った川では、これをもっと澄んだ夙川なみの散歩道にするべく工事が行われている。そう、誰しも望みは同じはずなのだ。

私は文明を単純に批判する気は毛頭ない。私にとって科学技術は常

砂田氏御夫妻を囲んで、
“みんなの家”にて

に賞賛の対象である。人類はすばらしいものを生み出してきたとも考えられる。しかしながらそう信じられるのは、生み出してきた人々に自然を愛する気持ちがある限りにおいてである。そして、ほんの断片でもそれを感じることができなければ、文明はゴミだと言い切ることができるのだ。

文明の暴走はもはや一条の光ではどうにもならないのかもしれない。自然は私達を許してくれないかもしれない。「国民は無力かもしれないが、それでも『政治家は間違っている』と声に出していわなければならないのだ」と誰かが言った。でも私は、政治にはあまり期待していないが……。たとえ手遅れで徒労に終わろうとも、私達は人間の尊厳を守るべく、自然を尊敬するという姿勢を何とか表に出さなければならない。それが現代に生きる人間の義務なのだと思う。

環境・公害問題—奇形ザルから水俣へ—

甲南大学　理学部　三回生　小林　睦

水俣と聞いて、人はどんなイメージをもつのでしょうか。多くの人達は、鉛色の海にかすんだ空、そして灰色のさびれた町並みを想像することでしょう。誰もが小学校の授業で学んだ水俣が、そんなイメージを形づくらせるのだと思います。今回、私達は水俣の町とそこに生きる人々を見てきました。そして私は次のようなことを考え、思いをはせるのです。水俣が何を訴えようとしているかを。

水俣病は、もう三十年以上も前から発生していたようです。その後現在に至るまで、多くの患者さんが生まれ、苦しんでこられました。私達は水俣に来て、患者さんやそこに生きる人達に接しました。その人達は明るく、谷口先生と一生懸命に話しておられました。私はこの

『天の魚』の仮面の
ヒントになった絵

時、水俣の人達の笑いや、話す動作に何か恐いぐらいの訴えかけを感じ、うろたえてしまいました。いったい何の訴えかけなのか、何を叫びたいのか、その時点ではわかりませんでした。しかし、砂田先生にお会いして、その焦点がだんだん定まってきました。砂田先生は、乙女塚には水俣病に関するものだけでなく、戦争にまつわる沖縄のものなども祀られ、そして、それらすべてに共通するものに自分が共鳴しているのだとおっしゃっていました。では、砂田先生が共鳴していたものとは、何なのでしょうか。これを考えるには、現代の文明や人間社会をとりまく環境をもう一度見つめなおす必要があるのではないのでしょうか。

人間はより便利により豊かになろうと、その英知を結集し社会や文明を築き上げてきました。そして、それが高度になればなるほど人間は考えとは裏腹に、大きなつけを負わされてきました。それが今ここにきて、いやもっと以前からであったかもしれませんが、自然破壊や環境汚染などというかたちで、私達のまえに現れてきたのではないでしょうか。以前、哲学の授業で『奇形ザルは警告する』というビデオを見ました。内容は、餌づけされたサルに奇形が発生し、その原因がエサにあるらしいというものでした。そのエサは人間が食べているものと同じでした。私は水俣でのことを考えるとき、妙にこのビデオがフラッシュバックするのです。現代の人間が食べているものは、手軽に手に入り、見栄えのいいものがほとんどです。そのような食物によって餌づけされた結果、人間の代わりにサルが障害をもつという悲劇が起こりました。そして、水俣では物質的豊かさを求めるがあまり、まさに人間に悲劇が起こったのです。これとよく似た例は、考えればいくつも挙げることができます。他の公害病も勿論そうですし、戦争も見方によればその一例といえましょう。欲と欲とのぶつかりあい、それが戦争です。そして、それに勝っても負けても人間は犠牲を払わなくてはならないのです。このように現代の社会を振り返ってみると、

三日目・四日目
阿蘇にて

私達は豊かさと引き換えに払いきれないつけを負い、その上まだその豊かさの追求を支える社会をつくろうとしているのです。

では、そんな社会の中で生きる人間のうち、一体何人がそれに気づき、それを訴えようとしているのでしょうか。おそらく幾人もいないのではないでしょうか。訴えることのできる人間のほとんどは、犠牲となった人々なのです。私は砂田先生が共鳴されていたものを、ここに見ることができると思います。被害者の訴え、魂の叫び、それらに砂田先生は共鳴され、そして一人芝居という手段を通して、人々に訴えかけようとされているのだと思うのです。私はまだ一度も砂田先生の一人芝居を見ていませんが、もし見せていただけたならば、水俣で患者さんに最初に出会った時の感じと同じ感じを受けるような気がします。それは、何かしら恐ろしさをおぼえ、うろたえながらもいつの間にかその世界へ入っていくというような感じです。石牟礼道子氏の『苦海浄土』にこのような一節がありました。「年寄りたちは、子どもたちにゆずり渡しておかなければならぬ無形の遺産や、秘志が、自分たちの中で消滅しようとしている不安に耐えているようだった。朽ちゆく青年倶楽部のように、彼らの生身もこころも、風化を続けていた。夏の海辺のどこを歩いても、そのような風が潜んでいた。」私はこの文章の中に現代の人間や社会を見るのです。そして強く感じるのです。今、現在生きている私達は、次の世代に何を遺せばいいのでしょうか。このままの社会を遺すというのでしょうか。少なくとも今を生きる人間は、現実に起こった事実を伝えていく必要があると私は考えます。

芝居考

甲南大学　文学部　三回生　高垣　美成子

ふだん、クラブ優先になってしまい、授業も最後まで聞けず、なじみが薄かった私にとって、今度のゼミ合宿は、谷口ゼミの人々と長い時間を共にする初めての機会となりました。前々からこのゼミには「甲南生らしからぬ」深味のある人々がいると思っていましたが、この四日一緒にいてみて、甲南にもまだこういう人たちがいたのだと、安心もし、また頼もしくも思いました。

私はクラブで歌舞伎をしておりますから、程度はどうであれ、とりあえずは役者だと思っております。砂田氏の夢勧進・一人芝居の一部を見ることができたというのは、この合宿に参加することでえられた大いなる幸運でした。もしこの機会をのがしたなら、私はもう一生、砂田氏の演技を見る事はなかったかもしれません。

芝居とは、人に見せてこそ成り立つものだということは、私には分かっていたようで実は分かっていなかったように思います。というのは、私たちがクラブで芝居をする場合、「お客は、必ず誰かが来てくれるものだ」という確信のもとに練習をはじめます。言ってみれば、来るとわかっているお客のために、稽古をして、上演しているようなものです。昔クラブがまだできたてのころは、文化会同志のつながりも存在感も無かったので、今のような練習のみをしている状態からは考えられないほど、「見てもらう努力」をしていたにちがいありません。

見る人間が、個人の物理的な損得にこだわらず、心理的に満足することを求めてはじめて芝居を見に来てもらえます。歌舞伎は、日本の古典的な芸能でありながら、今日では一部の篤志家だけのものになってしまっている嫌がありますが、それでも、役者の方は今でも、厳しい練習をつんで舞台に立ちます。何を練習するのか。それは形ではないはずです。何百年たっても変わらない人間の心（情）を表現するための練習です。歌舞伎に於いては、義理と人情にしばられて、それでも恋せずにはいられなかった男女の心が、また主君への忠義をつらぬく二君にまみえぬ心が、表現されます。これらは、もはや現代人の関心をひかなくなった化石化した心情となってしまったのでしょうか。

砂田氏の芝居と、歌舞伎とは決して同一のものではないでしょう。けれど、「一人の役者が、舞台から何かを客に訴えかけている」ということ、これは芝居の原点です。芝居はあくまで芝居であって、タテマエであり、本音ではありません。いくら感情をこめて演じても（その役になりきっていても）それは芝居であります。他人が見て感動する芝居というのは、役者について、その芝居を演じている時だけでない、一本の太いスジを見いだせるかどうかであると思います。砂田氏のように、御自分のお考えを脚本にし、自ら演じ、水俣に住んで自給

自足をめざしていらっしゃれば、その芝居にはひとつのデフォルメも架空もなく、説得力のあることは明らかです。数週間をよどんだ空気のスタジオにこもって練習する役者とは迫力がちがいます。

金儲けのための軽い本が出まわる世の中で、本当に小説を書く為に命をかけた作家が存在し、それゆえ長く読みつがれてきたように、金儲けのためでなく自分の訴えたいことの表現の実現に一生をかける役者という存在がいていいはずです。そして私は砂田氏にお会いして、そのような役者を眼のあたりにした感激がありました。一本スジが通った役者を、間近で見ることができたのです。

砂田氏の演技を自主的に見たいという人がたくさんいること、あちこちから公演の依頼があるということは、まだ人間の心にも柔軟な所のある証拠です。「いい本が正当に評価され、多くの人に歴代読みつがれるようになるのは、春にウグイスが呼ばれもしないのに梅の花にやってくるのと同じさ。」と、今は亡き師匠が言っておられました。九州の水俣にも、呼ばれたわけでもないのにはるばる出むいていくウグイスをもっている梅がありました。私はそういう“芝居ウグイス”のひとりとして、砂田氏のようにスジガネ入りの役者を目指したいです。芸道論にも大いに通じるところのある、今回のゼミ合宿であったと思います。

今、自分にとっての「水俣」

甲南大学　理学部　二回生　辻　孝司

高校の授業で水俣病を含む公害の話を聞かされてきたが、その知識だけをもとに、「水俣」という言葉の印象を考えてみると、暗いイメージが浮かぶ。他の人も大半はそうだろう。又、研修旅行へ参加すると母に話した時、彼女は妙な心配をした。単に話を聞いただけでは、水俣病というものを理解することはできず、ただ漠然と感じている暗いイメージが人を不安にするのだろう。

さて、実際に水俣の地に降り立った時、そんな心配など打ち消すかのごとく、街はのんびりと落ち着いて、本当にここであの悲惨な出来事が起こったのだろうかと、疑ってしまった。そして宿舎の窓から見える海の広さにその思いはさらに強くなった。しかし、水俣病センター・相思社の高倉氏に市内を案内していただいた時に、岸壁でたわむれる魚が漁の対象にならないことを知って現実の厳しさをみせられた。やはり、水俣病の恐ろしさは随所に行きわたっていたのだ。それから恥ずかしい話だが、水俣駅の真正面にチッソ工場があるのを、市内見学で初めて知った。それだけに、自分の水俣病に対する認識の甘さを感じた。

今回の研修旅行で一番強く感じたことは、別にたいしたものと思われない行為が、場合によっては危険な事件に変わってしまうということだ。変な言い方をするようだが、水銀を河川に垂れ流しすることなど、やろうと思えば我々一般の人間にでもできることだ。そして、さらに言えることは、こんな時に限って人間のあさましい一面が表面化してしまうことだ。チッソ工場や行政側の対応方法の甘さや、訴えた人々を暴徒として扱うといった行為、そして、訴訟を起こしている原告側の運動の分裂とも受けとられる行動、患者達に対する一般の人間の差別行為など、数えあげればきりがない。

ところで、水俣病の患者や運動に参加している人々は、単純な見方によれば特別視されがちだが、相思社の高倉史朗氏、一人芝居の砂田明氏、劇症患者だった田上義春氏にお会いして、そのような見方は明らかに間違いであると再認識できた。特に砂田氏が言っておられた「『苦海浄土』という本を読んで、水俣が頭から離れなくなった。水俣にぜひとも住んでみたいと思った。」という言葉に、とても親近感がわいた。誰しも「○○に打ち込んでみよう。」と考えることがある。砂田氏の場合、その○○が偶然にも「水俣だ」と直感しただけのことだ。そして、水俣の現状を広い視野から見つめ、問い直し、御自身が以前からやっておられる芝居に組み入れて、人々の前で演じる。その芝居内容（実際に見せていただいたのは「草の学校」の一部分だけだが）が非常にわかりやすいので、観る人が、水俣病のことをよく理解できる。又、田上氏はじめ患者の方々は、水俣病になったことがきっかけとなって、人間世界の様々な面を知り、一時は絶望の極限にまで追い詰められたことだろう。しかし最終的にはその経験を自分の糧とし今を生きておられる。その姿から我々は多くのことを学ぶべきであろう。

「しあわせですか、しあわせですか、あなた今」通俗的とはいえ、心を打つこの歌詞を聞く時、はたしてみんなはどんなことを考えるだろうか。面とむかっていきなり言われたら僕も尻込みしてしまうだろう。しかし、時には真剣に考えてみなければならない。生活環境に関わるような問題は特に実情を少しでも知っておかないと、自分はいくらよくても、周囲からどんどん崩壊して、行き場がなくなってしまう。言いかえれば「実情を知らぬは余計に不幸ということだ。」と言っていながら、自分は水俣病のことを完全に知ったわけではない。だが知った分だけ今、自らすべきことがよく考えられるようになった。あいまいかもしれないが、今の自分としては自分なりに認識したことを少しでも普段の生活に生かせるようにしたいと考えている。水俣病問題が風化しないようにまず自分自身で注意していきたい。

自然の中の人間

甲南大学　文学部　一回生　北村　光子

砂田先生の話の中で、「生類の共存」という言葉が、強く私の耳に残った。一人芝居『草の学校』の中でもあったように、生類には生産者・消費者・分解者の三つの役割分担があって、そのうちのどれが欠けてもこの世界は成り立たない。欠けないまでも、一度そのバランスを崩してしまうと、元の状態に戻すのにとてつもない時間を要することになる。にもかかわらず、人間はこの世の中を成り立たない方へ方へと、知らず知らずのうちに向かわせているような気がする。

1950年代の高度経済成長期、チッソの垂れ流した有機水銀に汚染された海から食物連鎖による生物濃縮を通して、水俣病は発生した。

長い年月を経て水俣病患者が認定され、金銭的に補償されることで問題はもう解決するかのようにも見える。相思社の高倉さんも「水俣病の問題は近い将来終結する。」と言われていたが、水俣の海はこの先もずっと閉鎖されたままで、私たちがこの目で見た一見生き生きと泳いでいた魚たちは水銀に汚染されたままで、患者さんたちも完全に健康な体に戻ることはない。

水俣病をはじめとする公害の原因は何なのか？

自分の利益のためになら、他人の迷惑も無視するような考えや、危険を承知で目をつむってしまうような考え、そして科学を万能とする考えなどが、原因であるといえよう。

視点を変えてみると、農薬や添加物だらけの食品の問題にも同じ疑問が浮かぶ。放射線照射されて発芽しないジャガイモ・香料の効いたバナナ・薬づけのハマチ・りんご・みかん・小麦。どれも商品としての価値は高くても、後々、人体や生態系に与える影響を考えるとぞっとする。また私たちをとりまく環境の問題にしても、排気ガスだらけの空気、オゾン層の破壊等々、目先の豊かな暮らしを追い求めてその結果、実は長い時間をかけ自らを淘汰しているような気さえする。

見せかけの豊かな暮らしを求めて科学に偏重していると、本当の豊かな暮らしは得られないのではないか。もちろん科学を短絡的に否定するわけではないが、科学には限界があるということを誰もが知っていなければならない。人間が生きていく中で自然を征服することはできないし、もしできたとしてもその時は他の生類はもちろん、人間にも終わりに通じる時だと思う。人間が万物の霊長だなんて本当に誰が言い出したのか。人間の辞書にしか載っていない。植物も動物も人間も同じ尊さを持っているはずなのに。人間が他の生類を犠牲にする権利はない。人間が生きていく中で本当の豊かな暮らしはきっと「自然と共存」＝「生類と共存」していくことだと思う。

“水俣”研究旅行の実感

甲南大学　文学部　三回生　大石　優香

ゼミナールの研修旅行で水俣市を訪れて、まず最初に驚いたのは水俣のその美しさでした。山も海もそして家々も、静かで穏やかで透明な景色をつくり出していました。そのような水俣の風土からは、ここが水俣病を生んだ土地だとはどうしても思えませんでした。病んだ土地――水俣という私のイメージとのあまりにも大きな違い、いろいろなことを懐に持ちながら何もかも越えている自然の大きさを感じました。

実際に水俣病の患者さんに相思社でお会いしてみると明るくて、私達の無くしてしまった純粋さを持っておられるような気がしました。石牟礼道子さんが『苦海浄土』で書いておられた水俣病の患者さんの“ちょっと舌たらずの甘い感じの話し方”も実際に聞いてみると、ほんとうに優しい感じのするものでした。その純朴な語り口は、ある意味でまるで天使のように感じました。そして相思社の人達も、天使に近い方たちのように思いました。相思社のようにみんなが平等で、助け合って一緒に生活していこうとする姿は本来、人間の基本的な姿ではないかと思われました。

浮浪雲工房の方々もまた、患者さんたちは同情や特別の手助けを必要としているのではなく、普通に接する態度や、その人のできる仕事が必要なのだとおっしゃっていました。患者さんに対してあたり前に接する彼らの姿をみていると、どこかに同情の気持ちが入り込み、余計な気をつかっていた自分が恥ずかしくなりました。

砂田 明氏の乙女塚を訪れて感じたことは、物を見る視点の高さです。氏は、水俣という土地からさらに遠くの世界を見ておられます。劇の一部を見せて頂きましたが、その中には氏のすべての生命あるものに対する愛情が脈打っており、たいへん心をふるわされました。「天の魚」で使われる、無表情な仮面も氏が演じるからこそ、多様な表情を持ち、一人一人の心を打つのではないのでしょうか。今度はぜひ、実際に劇を見たいと思いました。

研修旅行から帰って、テレビのニュースで有明海の汚染魚が行き来できないようにしきっていた網をはずすといった放送を見ました。（これは元々、小さい魚は網の目から行き来できるということでしたが……）今回、水俣市を訪れて、患者さん自体が年をとって多くは亡くなってしまっている様なことからも、水俣病がだんだん昔のことになりつつあるような印象をうけました。水俣病に限らずその他の公害病、さらに公害病に限らず小さなひとつひとつの環境破壊・汚染がすべての人間への自然からの赤信号のように思えます。しかし、自然の赤信号も、公害病も、不幸にして自分や周囲の人々がその対象になっ

たのでなければ、普段の生活とはかかわりがなく、自分とは無縁の遠い世界の出来事、関係のないことのように思ってしまいがちです。大切なのは赤信号に気づき、砂田氏や相思社の人達のようにはできなくとも、もっと自分の出来る範囲のことでいいから何か小さなことから一つ一つ努力していこうという気持ちを持つことではないかと思いました。

今回、水俣への研修旅行で、水俣病の問題を自分の生活のレベルよりも、より高次のレベルの中で感じることができ、砂田氏を通して私の視点も今までより高くなった気がします。

ゼミ合宿運営後記

西村　由美・辻　啓之

本年度のゼミ合宿（S63年8月16日～19日）は、ゼミ長年の念願であった、演劇家砂田 明氏を訪問しました。九州への長い旅路のために、平年よりも1日長い3泊4日の日程となりましたが、水俣病センター相思社 高倉史朗氏の講演、水俣市内見学、田上義春氏や患者さんたちとの出会い、そして砂田氏の講演と非常に密度の濃い合宿となりました。

出発前には、“今回は視覚的記録を残そう”とU先輩、I先輩を中心にビデオカメラの撮影練習も行われました。8月15日に先発隊のAさんのパジェロが一日早く出発して、合宿が始まりました。

初日（16日）朝9時、集合場所は新大阪駅と新神戸駅の2カ所に別れて、新幹線の車中で合流です。その新幹線の出発時間を目前にして大阪組は大騒動していました。「Y君がいない！」下宿先や実家に電話をかけてみると、彼は集合時間を“12時間”間違えて夜の8時半を目標についさっき三重を発ってこちらに向かったということでした。我々は呆れて新幹線に乗り込みました。

博多での乗り換えをへて水俣駅に到着したのは午後4時、そこでパジェロと合流して迎えのバスと2台で、穏やかな町並みや美しい海を見ながら初日の宿である水天荘へ向かいました。5時からの開会式の後、夕食と入浴を済ませ、7時半から水俣病センター相思社の高倉史朗氏に「水俣病の歴史と現状」という講演をして頂きました。高倉氏はTシャツにGパンという親しみやすい格好で、資料を詰めたダンボール箱を抱えて来られたのが印象的でした。

講演の後は、高倉氏にも加わって頂いて恒例の“夜通しコンパ”の始まりです。とにかく飲んで話して、ようやく殆どの人が寝静まったのが朝の5時頃、高倉氏はその後2時間ほど仮眠して7時頃に帰っていかれました。あ、忘れていましたが、Y君は遅れながらも講演の途中で現れ、コンパにはしっかり参加していました。

二日目（17日）、早朝に帰宅された高倉氏が朝食後バスに乗って現れ、市内見学へと出発しました。真夏の暑さの中、高倉氏が説明しながら身軽に歩いていかれる後を、録音カセットを持って歩いて下さったK先輩、ビデオ撮影のために走りまわって下さったU先輩、I先輩、みんなのかばんを載せてパジェロを運転して下さったAさん、そして、へとへとになりながら、説明を聞いたゼミ生一同でしたが、市内を見て回るほどに、山海の美しいこの町に、現在でも、水俣病が大きな影を落としていることが実感されました。

相思社の生活学校・浮浪雲工房を訪問した後、いよいよ、砂田氏宅へ向かいました。水俣病や人類の文明の犠牲となったあらゆる生類を祀っている乙女塚を見学中、夕立に見舞われ、急いで作業小屋に移動

し、乙女塚農園の持ち主であり、劇症性水俣病から奇跡的に回復された、田上義春氏に当時の様子を語って頂きました。（一方、料理班は夕食の準備を始めていたのですが、Oさんが日頃鍛えた料理の腕をふるっておいしいカレーを作っているところへ、幹事Nが大量の水を入れてしまい、異様に薄いカレーが出来たことを書き加えておきましょう。）

夕食後、今合宿のメインイベントである砂田氏の講演「海よ母よ子どもらよ」を拝聴し、その中で、思いもよらず演劇『草の学校』を観せて頂き、感動と興奮がその後の歓談会まで続いていたようでした。

水俣での研修旅行としての日程を終え、三日目（18日）は阿蘇へと向かいました。砂田氏御夫妻と田上氏に別れを告げて乙女塚を発ち、熊本駅に到着したのは11時頃でした。駅周辺で各自昼食を取ったあと、レンタカーを5台借り、パジェロを含めた計6台で阿蘇山を目指しました。市街地を快調に走り抜け、景色の美しいなだらかな山道を走っていると、阿蘇山が見え始めます。みんなしばしその雄大な姿に見とれていましたが、よく見ると、山裾は晴れているのですが、頂上付近は雲に覆われています。山頂の案内所に電話で聞いてみると、やはり雨だったので、山は翌日登ることにして、南阿蘇国民休暇村に直行することにしました。

休暇村では入場シーンの撮影や部屋割、夕食、入浴を慌ただしく済ませると、卒論の中間発表が始まりました。発表は途中に花火をはさんで、11時半まで続きました。そして、また例のごとく朝まで酒宴がおこなわれました。

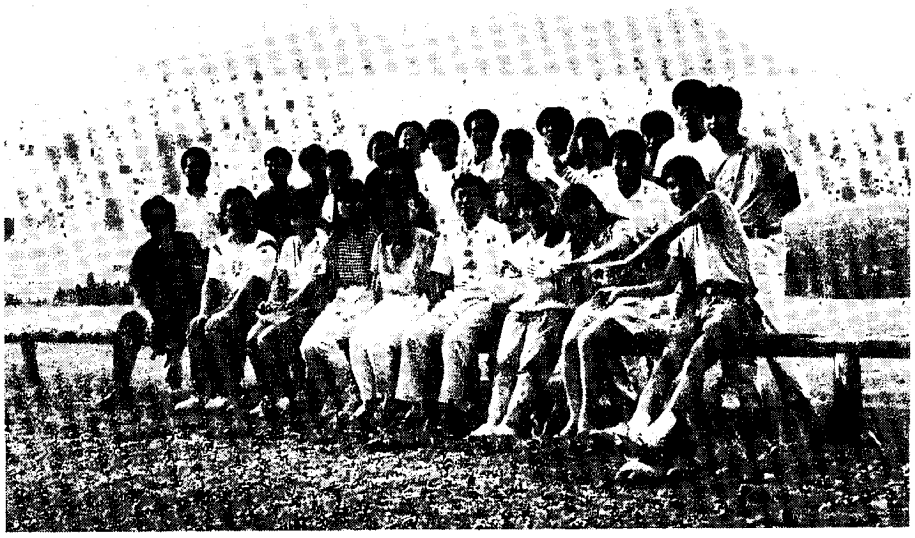
四日目（19日）は前日と打って変わって晴天に恵まれ、阿蘇山行が遂行されました。火口到着までに、車中に鍵を閉じ込めてしまったり、車が動かなくなったりと、ハプニングが多発しましたが、眼前に広がる雄大なパノラマを楽しみつつ時間が過ぎてゆきました。四日間の疲労と睡眠不足が限界にきていた帰途中に、幹事Tによる居眠り運転事件が勃発しましたが、そのお陰で全員の眠気が根絶され、無事に熊本駅に帰ることができました。レンタカーを運転して下さった谷口先生、I先輩、Yさん、Oくん、Tくん、ほんとうにお疲れ様でした。

熊本駅でパジェロ組と別れて、帰省ラッシュでダイヤの乱れているJRを恨めしく思いながら、博多駅では、走って新幹線に乗り換え、夕方8時半に新大阪駅に到着しN先輩の出迎えを受けました。

本隊と別れてからのパジェロ組は、まず由布院の大衆露天風呂で疲れを癒し、別府のフェリー乗り場で一泊して、明朝、銭湯につかってからフェリーで四国へ渡りました。交替で運転しながら半日かけて四国を横断し、鳴門大橋で淡路島へ、そして再びフェリーで明石に着いたのは、夜中の12時頃でした。パジェロの運転手として他のメンバーより2日も長い旅行をして、みんなを助けて下さったAさん、ほんとうに御苦労様でした。

この四日間は、稀にみるハードスケジュールでしたが、砂田氏の語られる《自然との共生》は環境問題を見つめてきた我々に新しい道を開いたように思います。今回の合宿では、砂田氏御夫妻、高倉氏、田上氏をはじめ、多くの方々にお会いする機会を得ましたが、紙面を借りましてお礼申し上げます。谷口先生には色々な面でご指導頂きまして深く感謝しております。運営にあたって多くの方々の協力により無事に四日間を終えたことを感謝申し上げます。

運営委員：西村　由美
　　辻　　啓之



石垣の
無間の浦に
汐汲みし
ひとりの女を
彼が多くらに

谷口文章様へ

一九八八・一二・二三

加藤周一

水俣に来てよかったと思いました。ありがとうございました　高野山大子

ここに来てさまざまなことを学びとることができました。やはりとたまる→

水俣に来ていろいろなことを本の上ではなく実際に心で感じることができました。　大石俊介

心の眼を開けて真実を知ることの大切さを切実に感じました　井垣博美

真剣に考えるきっかけを与えて頂きました　西田

水俣での素晴らしい出会いに感謝　飯田和子

水俣の美しい景観を永遠のものに　大江正俊

人の心を打つ芝居に不可欠なものを、教えていただきました。役者のバシクル　高垣美成子

ここに来て新しい生き方を学びました。　岩田哲郎

真剣に生きる人々の姿に心打たれました。ありがとうございました。　植木通博

水俣に来て・心が洗われる気がしました　堀田佳子

この地で私は何かを知った気がします。　小林暁

自分の足りなさが分かりました。　花畑武

生と死を演じる仮面のまなざし
それが人類の未来を見護ることでしょう
砂田明先生への感謝をこめて
谷口文章

海よ母よ子どもらよ
甲南大学谷口ゼミナール
第17回研修旅行
昭和63年8月16日～19日
於　乙女塚

新しきを知ることはくるしきことなり
りれと秋年も此年も今ここにある
世界に解き放たれたとき すべては
うつくしく感じられました。
今日の今日に参加させていただいたことに
感謝一つ　小谷美子

生きるということを無駄に使っていてはいけないと思いました。吉田拓史

海の景色が(ただまさし)まっさんの『貴自迄』のイメージにピッタリでよかったです　辻孝司

水俣の海の美しさが目にしみた夏でした　田中未子

水俣湾が片方だけ閉じられているのが、湾として開かれる入れるなんて まだ経済的な見方しかできないのかと怒を感じました　藤居司

水俣や人々の明るさに触れて、自分自身のことも反省させられました。　北村光子

いのちを
いとおしむ人に
なってください
共生の時代を
ひらく人に！
乙女塚石守　荷田照

一瞬が永遠であるような
そんな生き方を
見つめてゆきたいと思います
西村由夫

平和革命が必要です！人類のために。天野雅夫

美しい水俣の自然、と美しい水俣の人々の心が私に感動を与えてくれました　大内雅勝

全ての人に幸の訪えがとどくまで…まず自分に。辻修元

さびしさはひとりのことにて
かなしさはたましひのふるさと
—高村光太郎
この詩が座右の銘です。　桜本俊一